

マンガ研究 日本マンガ学会 vol.29

補遺冊子

日本マンガ学会
第20回大会
シンポジウム

BL^とメディア

第2部

「ボーイズラブ」の現在

改訂版

2023年 4月25日 発行

2021 11/21

日本マンガ学会
第20回大会
シンポジウム

BLとメディア

第2部

「ボーイズラブ」の現在

雲田 はるこ マンガ家

紗久楽 さわ マンガ家

三好 久子 『BE×BOY』デスク

岡田 夏実 『ちるちる』スタッフ

西原 麻里 名古屋短期大学准教授/司会

西原 では、時間になりましたので、第2部を始めさせていただきたいと思えます。名古屋短期大学現代教養学科の西原と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

第1部でも既に濃い話が聴けましたけれども、第2部では「「ボーイズラブ」の現在」という名前で、ボーイズラブというジャンルが出来上がってから現在に至るまでのさまざまな話をさせていただければと思っております。

最初に、今回の登壇者のご紹介をさせていただきます。まず、リブレの『BE×BOY』のデスクでいらっしゃいます三好久子さんです。

三好 長らくBLの編集をやらせていただいております。今日はお話しさせていただきますというところで、どうぞよろしくお願い致します。

西原 よろしく申し上げます。次に、2008年に「窓辺の君」というBL作品でデビューされました、マンガ家の雲田はるこ先生です。

雲田 マンガ家の雲田はるこです。第1部から楽しく聴かせていただきました。よろしく申し上げます。

西原 ありがとうございます。次が、同じくマンガ家の紗久楽さわ先生です。2012年に「かぶき伊左」という作品でデビューされ、BLの「百と卅」という作品で、第22回文化庁メディア芸術祭にてBLでは初の優秀賞を受賞されました。

紗久楽 マンガ家の紗久楽さわです。第1部からもすごい先生たちのお話が聴けて大興奮しています。よろしく申し上げます。

西原 ありがとうございます。4人目が、BLレビューサイトの『ちるちる』のスタッフでいらっしゃいます岡田夏実さんです。

岡田 『ちるちる』のスタッフの岡田と申します。よろしく申し上げます。

西原 ありがとうございます。第2部はこのようなメンバーで始めさせていただきま

す。では早速ですが、第2部のイントロダクションということで、私からボーイズラブという「ジャンル」のお話をさせていただきたいと思えます。

社会学者の石田佐恵子¹⁾は「ジャンル」について、現代において作品というものは、それがなんらかのジャンルに属するものやジャンルを特定するものとして理解されていると述べています。ではボーイズラブのジャンルの特徴や特定するものは何かというと、以下の4点が当てはまるのかなと思えます。

① 女性向けで、男性同士の恋愛や性愛を専門のテーマとする媒体・メディアがあるということ。② 男性カップルが「攻め」と「受け」に役割分担されていること。第1部でもちょっと話題になりましたけれども、③ 基本的に話自体がハッピーエンドであることや、恋愛関係がずっと続くことが多いこと。そしてPPTスライドでは「含まれることがある」と書いていますけれども、④ 性的な表現が結構欠かせない存在でもあるということです。こういった要素が「ジャンル」の定型であることが知識として共有され、かつそれが「ボーイズラブ」という名称で呼ばれるようになったのが、1990年代後半から末以降だといえます。

その定型についての基本的な共通理解をみていきます。まず、「攻め」と「受け」というときの「攻め」は、厳密には性行為で男性器を挿入する側、「受け」は挿入される側です。そこにキャラクターの造形や性格づけなどが結びついて、「攻め」だったら積極的だとか、格好いいとか、パワー(力)を持っている、「受け」だったらかわいいとか、中性的な容姿とか、押しに弱い



左：図 2-1『イメージ』1号
(白夜書房、1991年)



右：図 2-2
『サムライキッス1トルーパー
同人誌アンソロジー』（青磁
ビブロス、1989年）

などとなります。こういった男性同士の恋愛関係が成立したり、カップルであり続けたりすることが話の前提となるのが、ボーイズラブジャンルの定型といえるかと思います。

次に、そうしたボーイズラブ作品の物語設定をみてみます。堀あきこと守如子の『BLの教科書』にまとめられているものの一部を参考にする²⁾、多いのは学園もの、サラリーマン（スーツ）もの、ファンタジーなどです。裏社会とかヤクザの世界もよく登場しますし、近年ではオメガバースなども頻繁に出てきております。

では、言葉としての「ボーイズラブ」というものがどこから出てきたか。それは、少なくとも商業出版物では1991年12月に発行された『イメージ』（すたんだっぶ編、白夜書房）の表紙に記載されているものが最初だといわれています。一番上のところに「BOY'S LOVE COMIC」と書かれているのが、今映しているものでご覧いただけるかと思います【図2-1】。また、この後紹介する『b-Boy』という書籍が、青磁ビブロスから91年に創刊されます。ここでは「ボーイ」とか「ボーイズ」という表現がされていました。他には「やおい」や「耽美」という言葉も並行して存在していました。この時期は、いくつかの言葉がミックスされて使われていることが結構あったかと思います。

「ボーイズラブ」という名称が生まれつつあった1980年代末から90年代半ばは、書籍扱いのアンソロジーや雑誌などで、まさに「専門」と呼べる出版物が続々と登場した時期です。今回は95年までで区切って紹介しておりますけれども、この後もずっとたくさん雑誌など出てきます。

1989年に、ふゅーじょんぷろだくとから『KID'S』が出版され、90年に桜桃

書房から『BOY'S & BOY'S』と『GUST』、91年に先述の『b-Boy』と『イメージ』、『アップル花組』（桜桃書房）が登場します。いくつかの表紙などをお見せしたいと思います。

まずこちらが、今のリブレさんの前身に当たる青磁ビブロスから出版されていた、「鎧伝サムライトルーパー」というアニメ作品の二次創作同人をアンソロジーとして商業出版していた『サムライキッズ』というシリーズです【図2-2】。ちゃんと著作権元公認で出版されていたという商業出版物でした。この『サムライキッズ』がひじょうにヒットした。そのほか、名前はいろいろ変わるのですけれども、ふゅーじょんぷろだくとからは「キャプテン翼」の二次創作アンソロジーの『つばさ百貨店』（別冊COMIC BOX、1987年）などがありました。

そして、スライド左側が89年に出た『KID'S』（1号）で、右側が90年の『BOY'S & BOY'S』（1号）です【図2-3】。『BOY'S & BOY'S』のOのところに「LET'S YAOING」と書かれています。当時このように、いろいろなバリエーションのある言い方がされていたことが分かります。

91年に『b-Boy』というアンソロジーが創刊されます。左側が創刊号で「学園特集」【図2-4】、右側が2号で「サラリーマン特集」です。「学園特集」はこの後すぐ、4号でも登場しています。

そして青磁ビブロスさんが88年に創刊した、少女マンガ誌に当たるかと思われませんがうまくジャンル分けすることが難しい『Patsy』という雑誌があるのですけれども、その増刊号として93年に創刊したのが『MAGAZINE BE×BOY』です。今映しているのは創刊の広告ページなのですが、創刊号は国会図書館にも所蔵されていなくて。私の手元にあるのは、その後の2号と3号です。あと4号が出版され、その後に93年12月号から、増刊号という形ではなく独立創刊とい

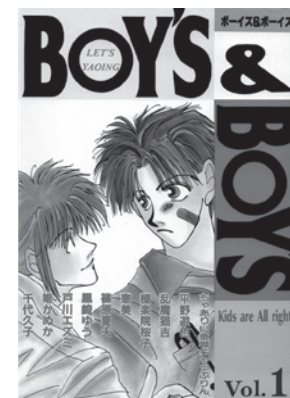


図 2-3
『BOY'S & BOY'S』1号
(桜桃書房、1990年)

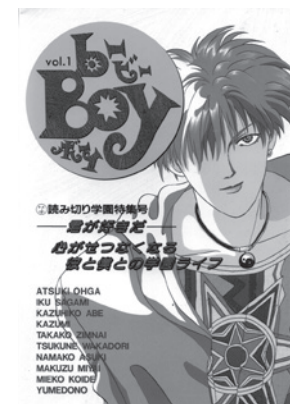


図 2-4
『b-Boy』1号
(青磁ビブロス、1991年)



図 2-5
『MAGAZINE BE×BOY』
12月(創刊)号
(青磁ビブロス、1993年)



図 2-6
左:『麗人』2号(竹書房、1994年)
右:『花音』1号(芳文社、1994年)



うことで通巻号が始まっていきます【図2-5】。ここから今に至るまでの『BE×BOY』の歴史が始まっていくという形です。

このように表紙を見ていただくと、男性同士のキャラクター造形が分かりやすいときもあるし、どっちが「攻め」か「受け」かというのが分からない感じもします。ガッチリ「攻め・受け」というものの判断ができるかという、当時はまだそうでもなかったかなという気がします。

他にも『麗人』(竹書房)、『花音』(芳文社)【図2-6】。続いて『いちばん好き』(冬水社)、『純一』(光彩書房)。そして『BE・BOY GOLD』(小説b-Boy増刊、青磁ビブロス)が創刊します。スライドの右側は、ちょうど高口先生が表紙を描かれていた号の『AniSen』(角川書店)という雑誌です。

また『b-Boy』では、「シヨタコン特集」(17号、1994年)や「ハッピーエンド特集」(19号、1995年)がありました。こんなふうには特集が組まれるのは、当時それが求められる証だったのかなと思われれます。

他にも『CARESS』(光彩書房)、『Risky』(ムービック)など、たくさんの雑誌やアンソロジーが出版されます。『Risky』の表紙には「BOY'S LOVE」と書かれています。

この「ボーイズラブ」という名前が広まるうえで大きな役割を果たしていたのが、『ぱふ』(雑草社)というマンガ・アニメ情報誌でした。たとえば96年6月号では「大特集 ^{ボーイズ・ラブ} 男男的恋愛」という特集がありました【図2-7】。この特集で

図 2-7
『ぱふ』6月号
(雑草社、1996年)
pp.14-15



図 2-8
有里まはる
「グレート・ディスカバリーズ」
(['b-Boy』19号、
青磁ビブロス、1995年)
pp.68-69



は、「オリジナルの同人誌的なおもしろさを持つ青磁ビブロスの『MAGAZINE BE×BOY』は、このブームの先駆的な存在である。」(pp. 14-15)などと、新しく登場したメディアを「BOY'S LOVE系」という言葉で表現しています。また他の号でも「ボーイズラブ」が頻繁に用いられるようになっていきました³。その後、97、98年頃には「ボーイズラブ」という名称が広まっていったことが分かっています⁴。

キャラクターの描き方をみると、たとえば91年の作品(こいでみえこ「^{まぼろよ}幻夜」『b-Boy』1号)では、「攻め・受け」というのがまだそんなに明確には判断できないような感じです。それが95年ぐらいになると(有里まはる「グレート・ディスカバリーズ」『b-Boy』19号)、こっちのキャラクターが「攻め」でこっちが「受け」だな、というのが、背が高いとか低いとかで判断できるようになっていきます【図2-8】。

こんなふう「ボーイズラブ」ジャンルがメディアとして徐々に確立し、同時に“お約束”（定型）ができあがっていくようになります。「攻め・受け」がキャラクター造形で分かるし、「攻め・受け」の役割は固定的で変わることがない。第1部で性と愛の話がありましたけれども、ボーイズラブでは愛情の強さと性行為が結びついたものとして表現されます。

そして2000年代以降は、BL作品が複数のメディアで展開するようになっていきます。アニメ、ゲーム、実写への展開、そしてインターネットメディアの普及も、BLの発展に大きな役割を果たしています。なかでも『BE×BOY』は、複数のメディアを横断した作品を世に送っていました。2006年に会社の倒産によりいったん休刊になりましたが、その後また復刊を果たしました。

ボーイズラブが「ジャンル」となってから、「攻め・受け」の外見の差異の表現や、カップルの恋愛・性愛生活を克明に描く物語から自分たちカップル以外の他者とともに生活している姿を描く物語まで、表現の幅がどんどん広がっていきま⁵す。ジャンルの“お約束”があるからこそアレンジのしがいがあり、物語を描く楽しみが広がっていく。それが今のBLの特徴といえるかと思っています。「実写BL」の話などは、最後のクロストークのところでできたらいいなと思っています。

かなり駆け足になりましたがイントロダクションは以上とし、90年代から現在に至るまでの「ボーイズラブ」の姿を、第2部の登壇者の皆さんとお話しいけたらなと思っています。では、私からの画面共有は停止させていただきます。さっそく、三好さんからお話をいただきたいと思っています。では三好さん、よろしくお願いいたします。

三好 お願いします。では、簡単な自己紹介をさせていただきます。私は1994年に入社しまして、それ以来ずっとBLのマンガの編集に携わっております。2012年からは月刊の『MAGAZINE BE×BOY』のデスクをやらせていただいています。

弊社では、先ほどご紹介いただいたのですけれども、月刊誌の『MAGAZINE BE×BOY』、隔月刊の『BE・BOY GOLD』、『小説b-Boy』、その他多くの電子雑誌を作らせていただいております。

まず、先ほどもお話にはあったのですけれども、弊社のヒストリーからここ30年ほどのBLの変遷をお伝えさせていただきます。少し長くなるかもしれないのですが、ちょっと語らせていただければと思っています。といいますのも、先

ほども触れられたとおり、弊社はいくつかの試練を乗り越えております。

まず、うちのビーボーイの編集部なのですけれども、2006年に一度倒産しております。前社は青磁ビブロスという会社でして、BLの黎明期をご説明するために青磁ビブロスの成り立ちをお話しさせていただければと思います。

青磁ビブロスは、89年頃からアニメや少年マンガのパロディ作品を集めたアンソロジーを出版したところから始まっています。当時だと「キャプテン翼」や「聖闘士星矢」、先ほどご説明いただいたのですけれども「鎧伝サムライトルーパー」のアンソロジーがとても人気だったと聞いております。

コミックマーケットなど同人誌即売会では、ジャンルごとに作家さんが集められておりまして、そこに訪ねていって同人誌を描かれている先生方に「うちで執筆いただけないか」というふうにお声がけをさせていただいて、作品を集めていました。また、コミケではジャンルの一つとして「創作JUNE」というのがありました。第1部で語られていた伝説の雑誌なのですけれども、この雑誌の『JUNE』に紐づけて、オリジナルで男同士の恋愛をお描きになりたい先生方が集められたジャンルなのです。

その「創作JUNE」で描かれていた方に作品を頂戴したり、ご執筆をお願いしたりしたのが、91年に始まった『b-Boy』というアンソロジーになります。たくさんの方に買っていただいて、いろいろな特集を組ませていただいたのですけれども、おかげさまで本当にいろいろな作品に人気が出まして、それが流れとして93年の雑誌の創刊につながったという形になります。ここで、「創作JUNE」で元々描いていらした先生方と、パロディ（二次創作）をお描きになられていた先生方にオリジナルのボーイズラブをお願いしたという、この二つの潮流から今のボーイズラブは成熟してきたということを知っていただければと思います。

『MAGAZINE BE×BOY』を93年に創刊したので、今から28年前ですね。この「BE×BOY」という雑誌名なのですけれども、意味が分かる方はいらっしゃるでしょうか。こちらは「美少年」から来ております。「美しいボーイ」という形で雑誌名を作らせていただきました。

西原 「ビーボーイ」という表記が、『MAGAZINE BE×BOY』だとBEかけるBOY、その前に出たアンソロジーだとアルファベットのbにハイフンでBoyと、いろいろな表記があるのですけれども。

三好 そうなのです。全部変えています、一応。読みは一緒なのですが、字で見た目が変わるように表記が変わっているという形です。

西原 どういう表記でも読み方が「ビーボーイ」になるという。

三好 そうです。弊社のビーボーイ編集部から出ているものは大体「ビーボーイ」というのを頭につけているので、うちのBLジャンルはここが主軸となっていることを示しております。

まず『MAGAZINE BE×BOY』なのですけれども、創刊時に目指していたのは“男の子同士の少女マンガ、男の子同士の『マーガレット』（集英社）”です。『JUNE』で描かれていたような男の子同士の恋愛の葛藤というよりは、キュンキュンする恋に軸を置いたポップな作品を集めて創刊されました。

編集方針は、編集者それぞれが面白いと思ったものを読者さんに届けたいということです。これは今も変わっておりませんで、描き手や編集者の熱量の高さを信じて作っているということで、ありがたいことにこの熱量が伝わってどんどん読者さんが増えてまいりました。

しかし、このビブロスが2006年4月に倒産してしまいます^{b6}。理由は投資の失敗だったのですけれども、倒産ということですので作家さんたちにも印税や原稿料が支払われなままでした。それで、倒産の説明を作家の皆さんにお電話でさせていただいていました。そうしましたら、先生方は私たちを責めるどころか、「これからも一緒に仕事をしよう」「続きを描くから一緒に頑張ろうよ」ととても励ましてくださいました。本当に愛のある先生方でしたし、力強いお言葉を本当にたくさんいただきました。その分、読者さんのこともとても信じていたのかなというふうに思います。

このとき、残務処理をしていた経理部には、本当に延々と読者さんからのファクスが流れ続けていました。「続きが読みたいです」「信じて待っています」というようなお言葉の数々です。このときに作家さんと読者さんと編集の強いつながりというのは本当にありがたく感じましたし、これは今も引き続き持ち続けています。

この期間なのですけれども、いくつかの会社さんから「一緒に仕事をしませんか」という形でお声をかけていただいたのです。その中の1社であるアニメイトグループと一緒に新しい会社をつくらせていただき、一ヶ月で創業にいたったという形です。創業から一ヶ月後には、出していた雑誌の復刊ができ

図 2-9
PS2の「Type B」版から
移植されたPSPソフト
『学園ヘヴン
BOY'S LOVE SCRAMBLE!』
プロトタイプ、2009年



ました。休刊していたのは正味一ヶ月のみということで、これはかなり記録的なことと聞いております。

このように、BLはマンガや小説を媒体としてどんどん読者を増やしてきました。この頃すごく言われていたのは、毎月10冊以上の本を買ってくださるような熱い読者さんに本当に支えられていたということです。その方たちが新人作家と一緒に育ててくださったという思い出があります。

さて、弊社のマンガや小説からは、さまざまなメディアミックスをしています。第1部でもお話がありましたけれども、まず数多く出されていたのがドラマCDです。本当にたくさんの作品がドラマCD化されて、声優ファンをも巻き込んで展開されています。ドラマCDに出演されたことによって人気を高めた声優さんも少なくないのではないかなと思っています。

2000年頃からはBLゲームというものができるようになりました。例えば、ユーザーは一人の主人公としてプレーするのですけれども、たくさん出てくる素敵なキャラクターたちと恋をしていくというゲームです。なかでも「学園ヘヴン」という作品がビブロスから出ておりました。こちらはPCゲームが2002年に発売されて、瞬く間にブームになりまして、Hシーンなどが入っていました。その後、そこをカットしたバージョンが2003年にPlayStation2でリリースされることになり【図2-9】、2006年にはテレビアニメ化されます。

また、BLで人気が出た作品がよくお声がけいただくのがOVA化です。弊社の作品ですと、新田祐克先生の「春を抱いていた」（1999-21年）という作品がOVAになっています。この作品は二人の俳優が主人公になっていますけれども、この俳優さんが演じる、つまり劇中劇の「冬の蟬」というタイトルの作品もOVAになっています【図2-10】。これは、幕末の時代に生きた二人の男を描



図 2-10
Blu-ray『冬の蝉 特別編集版』『冬の蝉』製作委員会、アミューズソフトエンタテインメント、2008年



図 2-11
岩本薫著・不破慎理挿絵『YEBISUセレブリティーズ 新装版』リブレ出版、2006年

いたもので、悲恋なので、BLのファンにとっては記念碑的な作品になっています。

さらに2000年代にブームになったのが、小説とマンガのコラボレーションです。一人の小説家が小説と原案を書きます。また、マンガ家がキャラクターデザインとマンガを執筆されます。つまり、小説とマンガが2本同軸で進行していくというものです。そのなかでも、岩本薫先生という小説家が小説と原案をご担当された「YEBISUセレブリティーズ」（2004-08年）という作品がとても人気になりました【図2-11】。不破慎理さんがキャラデザとマンガを担当されています。これは恵比寿のデザイン事務所を舞台にした作品で、癖の強いデザイナーたちとブランドオーナーだったりシェフだったりするキャラクターがたくさん出てくる作品です。さまざまなカップリングが登場しておりますので、このシリーズを読めば必ず好きなキャラ、好きなカップリングが見つかるという夢のような作品です。

西原 2000年代頃、ビブロスさんは他の会社とは違ってこうしたメディアミックスに力を入れていらっしゃったのかなと思ってまして。紹介されたような名作がたくさんありますし、メディアミックスによってキャラクターの幅やカップリングの幅がますます広がったのかなというふうに思っているのですけれども。

三好 確かに。弊社で小説の編集部とマンガの編集部がしっかり確立されていて、それぞれに力の強い先生方がいらっしゃったことでメディアミックスが実現したのかなと思っています。やはり、お一人で描かれるよりも世界が広がったり、キャラクターの幅も広がったりするので、ファンにとっては本当に夢のような企画だったと思います。

西原 例えばBLゲームの「学園ヘヴン」のメディアミックスでは、主人公は変わらないけれどもいろいろなカップリングが登場して、こっちのカップリングはマンガで、こっちのカップリングは小説で、という感じでメディア展開されていましたよね。

三好 そうですね。「学園ヘヴン」もドラマCDにもなっていますし、ノベライズ、コミカライズなどというふうに全てのメディアを網羅したのが、この作品だったかなと思います。

西原 ありがとうございます。

三好 こちらは他社さんの件なのですが、BLの歴史上ちょっと語りたいというのが、中村春菊先生の「純情ロマンチカ」（2002年から連載中、KADOKAWA）です。この作品がテレビアニメ化されたのが2008年なのですが【図2-12】、ここで初めてBLを知ったという方がすごく多くて、BLの市場を一気に押し上げてくれた作品かなと思っています。

また、中村明日美子さんの映画「同級生」（2016年公開。マンガは2006年、茜新社）なのですが、これはBLユーザー以外にも訴求した、本当にすごく良質な映画だったと思っております。

「さんかく窓の外側は夜」（2013-21年）はヤマシタトモコ先生の作品なのですが、弊社の作品でして、今年1月に実写映画が公開されました。ただ今、テレビアニメが絶賛放映中です【図2-13】。ぜひご覧いただければと思います。



図 2-12
DVD『純情ロマンチカ』vol.1、角川書店、2008年



図 2-13
2021年放送アニメ『さんかく窓の外側は夜』ティザービジュアル



図 2-14
2021年公開『劇場版 抱かれない男 1位に脅されています。スペイン編』ポスター

あと、桜日梯子先生の「抱かれない男1位に脅されています。」(2013年から連載中)という作品は2018年にテレビアニメ化されたのですが、ただ今、劇場版アニメが公開中です【図2-14】。映画になっていますのでぜひご覧くださいませ。

BLは、海外に広がっていきつづけています。本当にありがたいことに海外にもBLファンの方がたくさんいらっしゃいます。地球人にはBLを好むDNAがあるのかなと思うぐらい、BLの萌えが世界共通だということがわかります。

翻訳版は13ヶ国に展開しております。なかでも韓国語版や台湾語版、中国版は本当に昔から、BLが出た当初ぐらいから翻訳されておりまして、今もとても熱い読者がいらっしゃいます。ここ最近ではタイやベトナムの方にも読んでいただけるようになってきました。あと、注目されているのが南米ですね。スペイン語版とオランダ語版が出ていて、それが南米の方にも読んでいただいているので、こちらのファンが今注目されているという感じです。

また、JAPAN Expoなどの海外のコンベンションでBLの作家さんがすごくたくさん招待されまして、現地でトークイベントやサイン会なども行わせていただいております。

話は変わるのですが、私は94年に入社したのですが、その前はガイドブックなどを作っている一般書籍の会社で、そこから転職してきたのです。弊社は本当に特殊な会社で、ビーボーイというBL編集部に入ったときに、社員のほとんどというか95%が女性でした。当時はまだ若い方が多かったのですが、

その人たちが本当に熱心に助け合って働いている姿にすごくびっくりしました。前の会社とは随分雰囲気が違うなと思ったのです。

編集部にいる人たちが、本当に自分が欲しいものについてはとにかく一生懸命で、自分が何を好きか、何が欲しいのかというのがとてもはっきり認識できている。そして、主体的に生きているなというふう感じて、ある種ショックを受けた感じなのですが、それは読者さんの姿ともとても近いように感じています。本当に真面目な方が多いなと思うのですが、「頑張ってたっさん働いて、欲しいグッズや本をたくさん買いたいです」と言ってくださる方も多いです。

あとは、自分の欲しいものがどんなものかというのをはっきり主張する方が本当に多いのです。例えば、「スペックが高くて意地悪な『攻め』と、お酒が入るとチョロい『受け』のオフィス物が読みたいです」という感じで、すごく具体的なリクエストを下さる方が多いです。「続編はこんなふうな展開になってほしい」というのも、すごく積極的に作家さんにリクエストを下さったりすることも多いです。またリアクションが上手で、TwitterやInstagramにも本当に熱心にリブを下さったりします。コミケなどで先生とお会いになる機会が多いからだと思うのですが、とても気軽な関係性ができているなと思っています。

あと、作家さんにまつわる周辺情報にもとても興味を持ってくださっている方が多くて、例えば昨年ドラマ化された「30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい」(マンガは豊田悠、2018年から連載中、pixivコミック)については、脚本家や監督にもお礼のツイートをするような姿も多く見られました。しまいには、放映しているテレビ東京を推すような感じでテレ東グッズをたくさん買いに行くという、本当に作品が生まれる環境にすごく親しみを感じてくださっているのかなと思います。

BLの読者さんについては、最近変化も見えてきたと感じることが多くなりました。その一つは、BLを特別なジャンルと認識していないという方が多いことです。生まれたときからBLがありますし、あとよく聞くのが「お母さんが読んでいたので自然に読みました」という方、また、少女マンガの延長線上として何となくBLも読むようになったという感じの方が多くなっているなと思います。そういった方たちは、オタクという自覚がないです。オタク自認をしていません。なので、すごくフラットな目線でBLを選んでくれているのかなと感じることが多いです。

読者さんたちからよく聞くのは、「BLが一番癒やされる」という言葉です。

これはなぜかなと考えてみたのですが、読者さんの大半は今現在も女性ですが、女性たちにとっては男の子同士の恋愛というのは自分が介入できない想像の世界であるということです。そういったある種のファンタジーであるからこそ、安心して想像の世界に没入できるのかなと考えています。例えば少女マンガの場合、ヒロインを女性である自分と重ね合わせてしまうことがどうしても起きてくると思います。そこでヒロインの考え方や状況が自分とあまりにも違いすぎると、共感性が徐々に下がってくるのですけれども、BLだと自分と男性キャラクターは別、という前提のもとに物語を読み進めていくので、とにかく素直に共感性が上がっていくということが起きるのかなと思います。

また、BLでは本当にシンプルに男の子たちがとてもかっこよく描かれています。作家さんたちはすごく少年マンガが好きの方が多く、男性キャラクターに対して本当に憧れや尊敬が強いのです。なので、ご自身の理想をキャラクターに注ぎ込んでくださるところが、キャラクターをかっこよくさせているかなと思うのです。けれどもまた、そんなキャラクターに対して弱点を持たせたりするのがとてもお上手なので、それが読者さんがはまるポイントになるのかなと思います。

それから、BLは読み手が求めているものがすぐに反映されるジャンルである、というのがあると思います。例えば東日本大震災があったときは、結婚・出産もののBLが急激に増えました。これは、支え合う家族が大事だというふうに認識された時期だったからこそなのかなと思いました。このように、その時々社会が答えを求める状況などをBLはすごく敏感に拘って作っているので、ジャンルが変化してきているなと思います。

これはBLにおける大前提なのですが、主人公たちはある種の勇気のある恋愛を選択しているので、彼らが悩みながらも交流する姿に読者として励まされたり、背中を押されたりすることがあるのかなと思います。BLに描かれているキャラクターの生きざまに本当に惚れ込んでしまうということは、読者の反応からすごく感じます。

読者さんからときどきお手紙やコメントでいただくのが、「今現在心を壊してしまっています」、「仕事が辛かったりして、とても外に出られる状況ではなくなってしまっているけれども、作品を読んだら改めて生きようと思った」という感じのお手紙をいただくことが、実はたびたびあります。BLキャラクターの生きざまが読者さんに勇気を与えているのだなということが、ここでわかると思います。BLが読み手のすごく深いところを癒やしていく作用があると

いうのが、これらのことからわかっていただけたかなと思います。

あと、海外のイベントで現地の読者さんたちとお話しする機会があるのですが、そこでも「作品のどこに惹かれるのですか」という話をしますと、日本の読者さんとまったく同じ気持ちで読んでいる方が多いのです。それによって改めて、BLは世界共通の癒やしだなと感じることが多いです。

このようにBLはいち早く流行を取り入れて、どんどん新しくなっています。男の子同士の恋愛が主軸になった作品でさえあれば、それ以外は実はすごく自由なジャンルなのです。なので、作家さんの個性が出やすかったり、新しい作品や作風にチャレンジしやすかったりすることが多くあると思うのです。私自身、長く編集をやっているのですけれども、日々新しい発見や驚きがあって、本当に毎日楽しみでしょうがないという感じの日々を送らせていただいております。BLは読み手も描き手も本当にとても正直なジャンルです。それゆえに価値観が日々変化してまいりますので、どうぞ今後もご注目いただければと思います。以上です。

西原 三好さん、ありがとうございます。本当にBLというジャンル、「ボーイズラブ」というジャンルをずっと走ってこられたビーボーイさんですので、幅広さだけでなくBLに求められることが変わっていく様子に注目すると、とても面白いなと思いました。本当に変化のスピードがすごく速いなと思います。

次は、雲田はるこ先生と紗久楽さわ先生と一緒に出ていただきまして、お二人からお話ししたいなと思います。雲田先生、紗久楽先生、よろしいでしょうか。

雲田 はい、よろしくお願いします。

西原 今回はお二人一緒にお話を伺えたらと思って、いくつか質問をご用意させていただきました。

まず、先生方はいろいろなところでお話しされていることと思うのですが、お二人が男性同士の関係性に萌えたと思ったことに気づいたきっかけや、これまでどういう作品を読んでこられたか、デビューにいたるまでのいきさつなどをそれぞれ伺いできればと思います。雲田先生からお願いします。

雲田 そうですね。さわさんと私は古くからの友人なのですが、結構世代は

違うのですね。読んできたものは結構似ているのですが、多分、読む時期が違ったのだらうなと思っているのですけれども。

まず私は、オンタイムではなかったのですけれども、中学生ぐらいのときにそれこそ竹宮先生の作品や萩尾望都先生、山岸涼子先生、木原敏江先生などの作家さんの、70年代の本を急にさかのぼって読み始めたのですよ。確か中学校の美術部の先輩に教えてもらって「こんなにかっこいいマンガがこの世にあるんだ」って思って、それまで読んでいた子ども向けのマンガとは違ったので、すごく惹かれて読み始めて。でも、そのときは全然ボーイズラブはなかったのですよね。

西原 雲田先生の10代の頃は。

雲田 ボーイズラブというジャンルがまだなかったかなというぐらいの時期で、他の映画や小説などの中で70年代マンガのような、似たような描写があるものを探しては読む、みたいな。

紗久楽 そんな感じの描写がある本を見つけては読むというところも、私たちは一緒なのですよ。

西原 男同士の描写を探しているということは、すでにそれが好きだという自覚があったという。

雲田 そうですよね。もう何か無性に引かれて、一生懸命探して。その時代はインターネットもなかったのですけれども、映画の「モーリス」（原作はE. M. フォスターの小説、映画公開は1987年）や「アナザー・カンントリー」（原作はジュリアン・ミッチェルの舞台作品、映画公開は1984年）みたいなものをどうやって調べたのか。あと、井上靖さんの「夏草冬濤」（1964年発表）という小説があって、その流れでみつけたものです。あの頃のアンテナってすごいですよね（笑）。あと、大江健三郎さんもそういうものをいっぱい書かれていて、BLともJUNEとも全然違うところからピックアップして探して読んでいて。

西原 では、映画や文学ですね。

雲田 そうですね。私はそうだったのですよね。そのうちに、雁須磨子先生や

門地かおり先生の単行本が出るようになってきて、「すごくかわいい絵だけど、男の子同士の話だ、やったー！」みたいな感じで選んで読み始めたのがBLの始まりという感じだったのですよね。ルチルコミックス（スコラ、ソニー・マガジズ、現在は幻冬舎コミックス）でしたね。

そのときに高口先生の「幸運男子（ラッキーくん）」も読みまして、すごく画期的だったという記憶があって。あれが89年ですか。そうですね。それも『mimi Excellent』（講談社）という雑誌で連載していたのですよね。BLとは銘打ってなかったのですが、二人の恋愛が描かれていたのです。今回、高口先生もご登壇されるから、「幸運男子（ラッキーくん）」がすごくいいからとさわさんにお勧めして。

紗久楽 そうなのです。

雲田 「幸運男子（ラッキーくん）」はいいよと。そうしたら、それが「死にオチ」というか、すばるくんが亡くなって終わるといふのを私はまったく記憶から消して。主人公の二人がイチャイチャする所のことしか覚えていなかったんです。当時の記憶からパーンと飛んでいて、さわさんが読んだら「何も筋を知らずに読んだら、オチで死んでしまうからびっくりした」と、言われて私もびっくりしました（笑）。慌てて読み返したら、その辺りはふんわりと描かれていたので、私が都合よく記憶から消したんだな、とわかりました。

西原 ボーイズラブの、それこそ定型ではなかったではないか、みたいな感じですね。

雲田 そうですね。ハッピーエンドでなければいけないという風潮もなかったのでしょうか、その頃は。

西原 そうですね。

紗久楽 私が「今から読みます」みたいなツイートをして読み進めて、「え？すばる君、え？」と混乱したときに、Twitterアカウントで知り合いのマンガ家の先生たちがみんな「読んだの？」って急に集まって慰めてくれることになって（笑）。

雲田 みんな読んでいますので、あの世代の人は。「幸運男子（ラッキーくん）」はすごく画期的だったというのを覚えていて。それで、BLがどんどん出始めて、第1部でお話しして下さった歴史を、本当にシームレスにそのままだっているような感じですね。

西原 紗久楽先生は、BLの歴史を後から追いかけるという感じだったのですか。

紗久楽 私が最初にオタクになったのがCLAMP先生のマンガで、「カードキャプターさくら」（1996年から連載中）にめちゃくちゃハマったのですよ。そこからオタクになったのですが、幼稚園児か小学生ぐらいで。CLAMP先生のその当時の既刊をすべて集めて。読んでみると、雪兎さんと桃矢お兄ちゃんとか、星史郎さんと、それも昴流（すばる）くん（「東京BABYLON」、1990-93年）でしたけど、BL的な関係が普通にあったので、特に違和感も何もなく読んでいて。その刷り込みがあるからか、そんな関係の二人が出てくるのが好きになったのかなと思っていて。「聖伝 -RG VEDA-」（1989-96年）の阿修羅王と帝釈天とかも好きです。

文学で探すようになったのは、はじめて小説で泣いた「銀河鉄道の夜」（宮沢賢治、1934年発表）で、ジョバンニとカムパネルラがいて。

雲田 私も同じく、その流れで読みました！

紗久楽 これもお話の大きい内容は国語便覧で知って、読もうと思ったんですけど「終わり」は知らなかったので、衝撃を受けました。

雲田 宮沢賢治も、何故だか腐女子心をくすぐりますよね。

西原 では、ファンタジーの物語でも、男性同士の関係性が描かれる世界があるものに惹かれていたという。

紗久楽 文学の中にもあるというのに気がついたら、図書館に通って読んでという感じで。

長野まゆみ先生の作品とか、加賀乙彦先生の「帰らざる夏」（1977年）とか。柏原兵三先生の「長い道」（1969年）とか。藤子不二雄^④先生がコミカライズし

た「少年時代」（1978-79年）やその映画も見ました。

あと2001年に「サイボーグ009」の新しいアニメができたのを見て、そのときに「009」はおもしろいと思って。その時原作が読みたいなと思って、過去の60年代、70年代、80年代のマンガが文庫本になっている世代だったので、作家として言うのはあれなのですが、文庫本がブックオフなどで中学生には有難くお小遣いの範囲で安く買ったので、その辺のマンガをさかのぼって石ノ森章太郎先生や手塚治虫先生とか松本零士先生とかも読み始めました。

そうしたら同じ文庫化されている少女マンガの棚にもどんどん読書欲が侵食して行って、その先で24年組の先生や、さっきお話しされていたような「風と木の詩」などを読んでいっているという。雲田先生より10年ぐらい遅いのだとは思いますが、有名な作品を順番に読んでいったという感じですね。

でも、本当に最初はCLAMP先生なので、最初から刷り込みが。

西原 そうですね。CLAMP先生の作品はどれも男性同士の関係性が出てきますよね。なるほど。

紗久楽 BLで初めて読んだのは、藤たまき先生の作品で。

西原 藤たまき先生や、さっき雲田先生がおっしゃっていた門地かおり先生などは系統が結構分かるような気がしますね。お二人の作風の系統が。

雲田 そうですね。

西原 かわいいけれどもちょっと切ないような感じですね。なんだかすごくよく分かりました。特に雲田先生の絵柄などを考えると、なるほどなど。

紗久楽 デビューは、お互いばらばらにインターネットでマンガなどを発表したり同人誌を描いたりしていて、たまたま同じ時期にデビューしていたのですよね。

雲田 うん、そうですね。

西原 お知り合いになったのはデビュー後？

雲田 デビュー前からですね。

紗久楽 一緒に同じ作品で同人誌を作ったりして。その後にちょっと期間が空いたんですけど、本屋さんに行ったら「あれ？ このかわいい画、知ってる」みたいになって

雲田 そうそう。絵柄で気づいたのは私もそうなのです。本屋さんで単行本を見て、さわさんの絵柄で気づいたという。「あれはあの人ではないかな」と。ちょうどその頃にさわさんが上京されたこともあり、そこからまた遊ぶようになりました。

紗久楽 『窓辺の君』が出版されていたときだったので。

雲田 その頃もほとんど変わらないですよ。読み合っているというのは。

西原 お二方も画が初めから確立されている感じがありますね。

雲田 ねえ。すぐ画でバレるという。

西原 画で分かる。ありがとうございます。いろいろスライドを用意しているので、次に移りたいと思います。

先生方が作品をお描きになるときに、「攻め・受け」の描き方とか、どんなふうに「攻め」と「受け」を決めて描いていらっしゃるかを伺いたいのですけれども。

たとえば雲田先生だと「いとしの猫っ毛」（2010-17年）では【図2-15】、みいくんと恵ちゃんというカップルが主人公で登場しますが、二人はいわゆる「同軸リバ」というものですよ。

雲田 そうですね。

西原 一つの物語の中で「攻め・受け」役割が固定ではなく、その都度代わっていくという。みいくんが「攻め」のときもあるし【図2-16】、はい、こんなふうに、今度は恵ちゃんの方が「攻め」になるという感じです【図2-17】。



図 2-15
雲田はるこ『いとしの猫っ毛』5
(リブレ出版、2016年)



図 2-16
雲田はるこ『いとしの猫っ毛』5
(リブレ出版、2016年) pp.12-13

紗久楽さわ先生の「百と卍」では【図2-18】、肌の色が白い、目の細い方の卍さんが「攻め」で、肌の色がやや白くはない方の百ちゃんが「受け」なのですけれども、「受け」のキャラクターの方が背が高いですね。

こんなふうに、カッコいい「攻め」様を抱っこして、抱えて逃げたりするとか【図2-19】。



図 2-17
雲田はるこ『いとしの猫っ毛』3
(リブレ出版、2014年) pp.160-161

雲田 そうですね。

西原 「百と卍」では二人の体格の差などが現れたりするような感じで描かれています。お二方は「攻め」と「受け」を描くときに、いわゆる定型とはちょっと違うような感じで描かれるのがすごく魅力的なところかと思いますが、いかがでしょうか。



図 2-18
紗久楽さわ『百と卍』3
(祥伝社、2019年)



図 2-19
紗久楽さわ『百と卍』1 (祥伝社、2017年) p.14

紗久楽 私は何となく、2020年代のいろんな人が求める「受け」というのは、一般的に見目が「かわいい」ということに限定されるのではなくて、その求めている人が「かわいい表情をしているのが見たい人」を受けを選ぶんだなと思って。だから私が基本的に大きな「受け」が好きなので、百さんはそうになりました。体積が大きいとか(笑)。だから基本の受け像の定形は歴史的にあっても、今はいろんなキャラクター、属性、体格、性格の人が「受け」のところが見たいよなって思います。「攻め」はなんだろう……想いの強い方が「攻め」になるかな(笑)。

雲田 この間、さわさんにそのお話を聞いて、なるほどなって思いました。私のマンガは受け攻めが曖昧なことが多いんですけども、かわいい表情を見たい方が「受け」で、さらに言うと、かわいい表情は絶対見たくない方が「攻め」だっていうシンプルな形です。

ですが、リバにしたいになってしまう場合は、カップルのどっちもかわいい様子を見たくなくて時です。でも、圧倒的に「攻め」でいてほしい人には、そういう表情を見たくないぐらいなのですよ。むしろかっこよくいてほしいと思うので、それがはっきりしている場合もありますよ。

西原 かわいいではなく、キリッとしていてほしいという。

雲田 そう。だらしなところを見たくないみたい。そう思われるのが「攻め」なのかなと思います。まあ、滅多にいないんですけどね(笑)。

西原 なるほど。

雲田 「かわいい表情を見たいのが受けだ」っていうのはこの間さわさんに聞いて、めちゃくちゃなるほどなって思いました。単純に容姿がかわいい方が受け、ではないんですよ。

西原 「百と卍」の卍さんなどはまさにそういう。

雲田 そうですね。

西原 攻める側ですものね。

紗久楽 大枠ではその要素が強いですけども。でも「攻め」にも笑わせてやれよ、喘がせてやれよ、可愛い表情をさせてやれよ、可愛い子にも「攻め」をさせよっていうのも思うので、作中の細かいバランスはもっと考えています。「卍兄ィは可愛い」と百さんに言われているので、卍も可愛い男です。だからこそ、連載当初は「卍の方が受けだったら読んだのに」という、「卍が受けているのが見たい」という意見が途中出てきたりしたのですが、それは正解かなって思いました。誰かが「受け」にしたくなるくらい魅力的、っていうのが最近の「攻め」に必要な要素かなって思ってます。

雲田 私とさわさんはすごく性癖が似ていて。月と太陽の組み合わせというか、月っぽい子は「攻め」で、太陽っぽい子が「受け」というのが好きなのですよ。なので、百ちゃんは圧倒的受けなので、私の中ではリバラなくていいんです(笑)。

西原 なるほど。明るく照らす側が「受け」。

雲田 そうそう。

紗久楽 そして身体の大きい子が好きなのだけれども、江戸の一番の色男は絶対描きたかったの。それで卍さんは、あの風貌になりました。江戸一番の色男は色白なのですよ。

西原 ああ、なるほど。

紗久楽 当時は肉体労働者が多いので、基本的には日焼けしている人が多いのですけれども、若旦那とか、働かなくても生きていける遊び人のカッコいい男性は、日焼けをしていないところがモテるといことがあって。

雲田 江戸時代の価値観はそうだったのですよね。

紗久楽 そうそう。なので、江戸一番の色男を描こうと思ったときに、卍さんのようなタイプになって。肌は「攻め」の卍さんが白い方がいいという。

西原 歴史的な背景を実際に踏まえた肌の白さということなのですね。

紗久楽 百さんは健康的で、江戸によくいる男の子というイメージです。

雲田 それがいつの間にか、白い方が「受け」というふうになってしまったのですよね。

西原 そうですね。それこそ「受け」キャラの肌の白さというのは讃えられることが多いかなと思います。

雲田 ジルベールもほんのり紅はさしているけど、紙の白色そのままなほどに、石膏像のような色白ですものね。

西原 そうか、「猫っ毛」でも色白の話が出ていませんでしたか。

雲田 そうです。白い髪の方の恵ちゃんが白いという設定で、「受け」とい

う。でも恵ちゃんは、受けだからってというか、猫っ毛の人って色白が多い気がして、そうしています。

西原 たまに恵ちゃんがこうやって「攻め」になるときが。

雲田 そうですね。

西原 「守られるばっかじゃヤダよ」と言って。

雲田 このエピソードは、恵ちゃんもみいくんのかわいい表情が見たくなる日もあるだろう。あの性格ならきつとそう、という思いから、自然と出てきたエピソードです。

西原 かわいい表情とか、自分が攻めることによって相手の魅力を見てみたい、引き出したいみたいなのは、結構ありますよね。この後にもスライドを用意した場面があるのですけれども。

例えば、私がちょっと聞いたかったのは、卍さんがご自分のおじさん（「祝」という登場人物）のことが子どもの頃から好きで、自分が「攻め」になりたいというのが【図2-20】。

雲田 時代的には「受け」扱いだったけど、自分は「攻め」になりたいという。

西原 そうですね。自分の方が年下なのだけれども、「惚れた野郎を“可愛がり”てエンだ」というセリフがあって、なるほどなど。ここは本当に名シーンだと思います。紗久楽先生はどのようにお考えになって描かれたのでしょうか。

紗久楽 私はいろいろ考えて、江戸の男色をBLとしてどう描いたらいいかなと思ったときに、男色関係はいわゆる「攻め」と「受け」、念者と若衆という立場が、「年齢」で決まってしまうのが当時は当たり前前の制度とはわかっているけど、今の感覚からすると疑問だったのですよね。その人の個性や嗜好では選ぶこともできないの？、と。だから、この頃の制度では卍さんが若い頃は歳が下だという理由で問答無用に「受け」にされるけれど、それはこの人自身の気持ちには反しているよな、というのを描きたかったんです。男色をそのまま描く



図 2-20
紗久楽さわ『百と卍』2
(祥伝社、2018年) p.136



図 2-21
紗久楽さわ『百と卍』2
(祥伝社、2018年) p.171

のではなく、制度に反した恋を描いた方がBLになるのかな、という自分の答えが出ました。あとBLでおじさまが出てくるときは結構線の細いおじさまが描写されることが多いなというのがあって、私はごっついおじさんも愛でていいのではないかとあって、あえて描きたかったという【図2-21】。

西原 紗久楽先生がインタビュー¹⁷でおっしゃっていたのが、「胸毛を描いたらいいのではないか」とお友だちから言われたとか。

紗久楽 すごく激推しで、「絶対胸毛は置いてください」と言われて。

雲田 毛フェチも共通点なのですよ、私たち(笑)。

西原 ああ、なるほど(笑)。確かに雲田先生もよくすね毛とか描かれますね。

雲田 デビューした当初はまだご法度感があったので、ずいぶん控えめに描いています。

図 2-22
『onBLUE』32号
(祥伝社、2017年)



西原 確かに、描写の変化がありますね。

紗久楽 この作品の中では、祝さんは「受け」にならなかった「受け」という感じで。

西原 そうか、なることができなかった。

雲田 それこそ卍さんは「一人BL」なのではないですか？

西原 本当ですね。「一人BL」という名言についてもじっくりお伺いしたいと思います。

雲田先生の作品でもう一つ、「新宿ラッキーホール」(2010-18年)のカップル(サクマと苦味)もいいですね【図2-22】。特にサクマさんの「受攻変化伝説」というのは「一人BL」を感じます【図2-23】。

雲田 そうですね。彼も「一人BL」に分類できると思います。「一人BL」の説明をさせていただきますと、存在そのもので受けにも攻めにもなれる、立っただけでBLを感じるキャラクターのことです。既存のキャラクターで例えて言うと、「風と木の詩」のジルベールもそうですが、「BANANA FISH」(吉田秋生、1985-95年)のアッシュや「摩利と新吾」(木原敏江、1977-84年)の摩利くんもそうですかね。「新世紀エヴァンゲリオン」(庵野秀明原作・監督、1995-96年)の



図 2-23
「ロングインタビュー「いつか続編を描きたいと思っていました」『onBLUE』32号(祥伝社、2017年) p.29

渚カヲルくんなんかもそうかもしれません。腐女子の心を掴む名キャラクターというのは代々そういう傾向があるなと思って。「かわいい存在として受けっぽく愛でられていたけど、成長して「守るべき存在」をみつけると、攻に変わっていく(自我が生まれていく)というような境遇になりやすいキャラクターのことです。

西原 サクマさんはまた魅力的な、元ヤクザのおじさまでいらっしゃいます。彼も「攻め」になったり「受け」になったりしますが、本来は「受け」？

雲田 そうですね。またリパですね(笑)。

紗久楽 そういうものしか描いていないですね、われわれは(笑)。

西原 でも関係性の中で、自分も相手をかかわりたいとか、常にかわいがられる側ではなくて変化することはきっとあるだろうと思うので、ある意味ですごくリアルだなと。

雲田 それが男同士である醍醐味というか。

西原 そうそう。そう思います。

紗久楽 第2部最初のお話であった、90年代ぐらいに「攻め・受け」の見た目や役割がだいたい決まってきた固定化され、私たちが描き始めたのは多分決まり切った後の10年後とか15年後ぐらいで。決まり切らなくても「攻め・受け」概念はあるし、でもどうなっても男子二人はいいし、別に決まりはいらぬのではないかというか、勝手に描いているという感じですよ。

図 2-24
雲田はるこ「モンテカルロの雨」『ばらの森にいた頃』(祥伝社、2017年) pp. 60-61



西原 「攻め・受け」がどうであっても男子二人に魅力があるという。

こちらは「モンテカルロの雨」という雲田先生の短編作品(2014年発表)ですが、ここでは背の高い俳優さんが女装しています【図2-24】。こちらが「攻め」で、いわゆる「女装攻め」と呼ばれるキャラクター。

雲田 そうですね。

西原 雲田先生は「女装攻め」もわりとよく描かれますよね。

雲田 そうですね。これまたなんでなのでしょうね、性癖としか言えない気がします、女装した男子に攻められて嬉しくなってしまうノンケの受けが大好きですね。その設定だと年上を受けになりがちです。年上の方が「受け」というのも好きですね。

西原 確かに。「モンテカルロの雨」の、年上「受け」のおじさんがちょっとくたびれている感じがあるのもいいと思います。

紗久楽 私も「女装攻め」好き(笑)。花魁コスプレの攻めが描きたいなあ。

雲田 大きい人の「女装攻め」が好きなのです。

西原 さらに次に行きたいと思います。お二人の作品には、そんな男の子たちのわちゃわちゃ・いちゃいちゃしている様子や、男の子のかわいらしさが、セリフなどでも現れる場面があるんですね。

例えば、「いとしの猫っ毛」でみいくんと恵ちゃんの体型について、雲田先生がこだわりを持って、こういう肩だとか、こんな腰つきだというのを描かれていらっしやいますし【図2-25a】、右側の「百と卍」だと紗久楽先生が、百ちゃんのお尻（おいど）がすごくぷりっとしている感じをかわいく描かれています【図2-25b】。体型に対するお二人の好みや萌えというのが作中ですごく如実に表れているかなと思うのですけれども、いかがですか。

雲田 私たち二人ともに共通してるんですが、身体の大きい「受け」が好きだっていうのは、その嗜好は特殊な方だと思います（笑）。それは自覚しています。でも私は自分の好みをそのまま出すことは少なく、いろんな体型の人を描くのが楽しくて、やっていますけどね。

紗久楽 美少年とか少年とか定型も素晴らしいけれど、世界にはいろいろな子がいるし、いろいろな人を描きたいし、「いろいろな人たちがBLに出てくれば最高じゃん」という気持ちですよ。

西原 いろいろな人が世界にいる。

雲田 そうですね。

紗久楽 ファッションチェックがちゃんとキャラクターみんなのぶんあるとか、全員が全然違うし。

西原 そう、すごいですよね。「ねこっけファッションチェック」は単行本から引っ張ってきていますけれども、ファッションチェックが毎回いろいろ違うんです。

雲田 ねえ、細かく。

西原 それぞれの季節に合わせて。

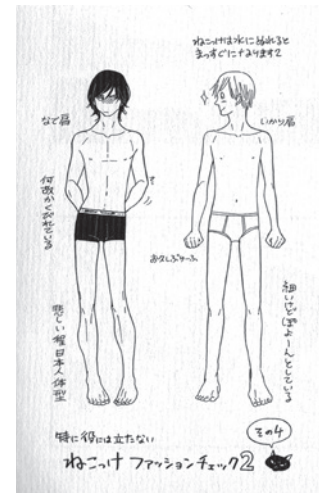


図 2-25a
雲田はるこ『いとしの猫っ毛』2
(リブレ出版、2012年)
p.79



図 2-25b
紗久楽さわ『百と卍』4
(祥伝社、2021年) p.121

雲田 どうでもいいことばかり描いているのですけどね。

西原 でも、そこに作家さんたちのこだわりというか、何が好みかというのが表れているのだと思います。

紗久楽 百さんのお尻については、私は元々こういうぷりんとしたお尻が好きだったんだ、と気が付いたのは描き始めてからなのです。描き始めてから読者さんに「すごくお尻がかわいい」と言ってもらえて、そうなんだと思ったのですけれども、その描写に対して「男性なのにこんなにお尻がぷりっとしているのは違う」とか「女の子のお尻みたい」という意見も最初は来ました。けれども、ネットでふんどしを着けて写真を撮ってSNSに自主的にUPしている男性の方はかなりいて。そこでみた男性の身体を素敵だと思って描いてるだけなんです。創作の中で決まり切った印象の身体だけではなく、実際には色々な身体がいっぱいあるのに、っていうのは描きたいですよ。

雲田 男の人のお尻でも、こういうお尻も全然ありますよね。それにみんな気

づいていないだけだという。

西原 男性の生のお尻は今まで（メディア表現として、女性と比べて）発見されてこなかったわけですから、そういう意見が来たのですね。

この、百ちゃんの指がお尻のお肉に重なって、むちっとしている感じが分かる。

紗久楽 最近はモデルになってくださる方がいらっちゃって、本当にこのような感じなので。そうしたら、みんな「違う」と言わなくなって。

雲田 男性の体も、どんなに筋肉隆々の人でも、ジャンプしたらポヨポヨするし、触ったら皮膚は柔らかいでしょ？って思う（笑）。服を着た状態ではなく肌だから、という感じがありますよね。

西原 確かに。「いとしの猫っ毛」の恵ちゃんの体つきも「細いけどぽよんとしている」と書かれていますけれども、そのぽよんとしている感じが線から伝わりますものね。筋肉がなさそうな感じだなど。

雲田 ねえ。そういうものを発見しては描きたいのでしょうね、きっと。

西原 なるほど。本当に、こういうふうな男性身体にいろいろなバリエーションがあるということに気づいて描かれるようになったということが、BL表現の変化を示していると思います。

あと、こんなふうに【図2-26】。

紗久楽 顔がかわいい（笑）。

西原 かわいい。みいくんビジョンでは、恵ちゃんはこのふうなまつ毛がぱさりと生えているように。

雲田 見える。

西原 見えていて、表情もかわいいですし。

あと、二人はこんなふうなわちゃわちゃというか、いちゃいちゃしているの

図 2-26
雲田はるこ
『いとしの猫っ毛』2
(リブレ出版、2012年)
pp.28-29



ですね【図2-27】。眺めているとホッコリしてしまう。

紗久楽 今回、スライドでは挙げられていないと思うのですが、普段のわちゃわちゃも、色っぽいシーンも、この子たちだけの本当に二人だけでしか交わせないの会話を描いてくれてるんだとか、二人だけの行動を見せてもらっているのだなど、雲田先生の作品を読むと感動します。本当にお上手で、私はこんな色っぽいシーンはこれまでのマンガなどで見たことがなかったと思って。大好きな表現。

雲田 そう言っていただけるなんて嬉しいです、ありがとうございます。

西原 本当に紗久楽先生がおっしゃるとおりで、いちゃいちゃしている様子がすごく自然というか、本当にキヤッキヤしている、実際にこういう男の子たちがいるよな、と思うような。

雲田 そうですね。「いとしの猫っ毛」という作品では、そこを細かく細かく描こうというのがあったのかもしれないですよ。日常を描くという。

紗久楽 かっこいいという定型だけの「攻め」様だと頭の匂いをかいでくれないですよ（笑）【図2-28】。

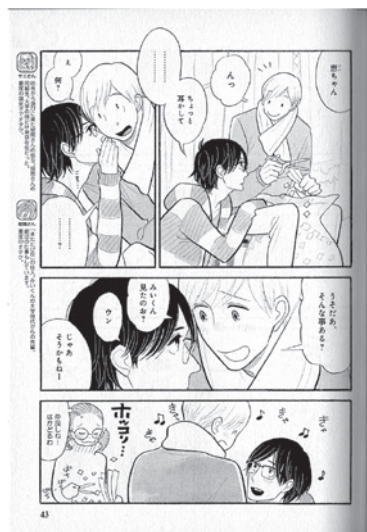


図 2-27 雲田はるこ『いとしの猫っ毛』3
(リブレ出版、2014年) p.79



図 2-28 雲田はるこ『いとしの猫っ毛』5
(リブレ出版、2016年) p.43

雲田 そうですよ。

西原 カッコいい「攻め」様だったらスハスハしてくれないような気がしますね、確かに。こういう場面を描くにあたって、雲田先生は日常的にどこかで観察されて、見つけてこれたりするのですか。

雲田 思いつき次第付箋にメモしておいて。本当に細かいメモなのですが、それを描く前に見て、どれを描こうかなという感じですかね。

西原 では、日頃から結構ストックがなされているという。

雲田 そうですね。そういう感じでやっていますね。

西原 みいくんのスハスハから、恵ちゃんの髪の毛の柔らかさとか、匂いがいいのだろうなというのが分かります。そんな二人の様子を見ると、単純作業がすごくはかどるとサエさんが言っているのもすごく共感できるわ、と(笑)。

雲田 この子は腐女子なのですよ。

西原 そうそう、蛭間先輩の彼女さん。われわれの気持ちを代弁してくれている方です。

雲田 そうです。腐女子がマンガに出てくるのが嫌だって意見も見たことがあるんですけど、そういうのも今はもうなくなりましたね。

西原 第1部で、やはり竹宮先生もウィーン少年合唱団が良かったという話がありました。人間二人の関係を密に描くのもあるけれども、ウィーン少年合唱団みたいに最初から多人数というか、少年愛の「風と木の詩」でもまず男の子たちが大勢いてわちゃわちゃしているのが描きたかった、というのを聞いて、すごく感動したのですよね。

雲田 本当ですよ。

西原 思いが脈々と続いている、と思います。

雲田 貴重なお話。

西原 そうですね。そこにいてくれるだけでいいと思いますものね。

「百と卅」の中でもそういうシーンあって。たとえばこちらは、火消しの「を組」の皆さんがいるページです。これは結構わちゃわちゃしているシーンだな、と思ったのですけれども【図2-29】。

雲田 そうですね。火消し萌え(笑)。

西原 火消し萌え、そうそう(笑)。

雲田 さわさんの火消し萌えが遺憾なく発揮されて。

紗久楽 これは「わちゃわちゃさせてください」と、お友だちがすごく言ってくれて。

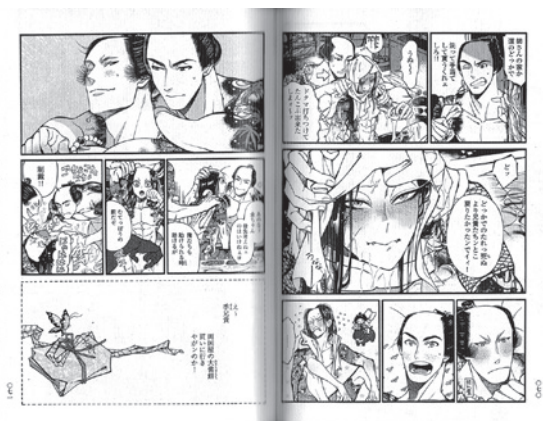


図 2-29
紗久楽さわ『百と卍』4
(祥伝社、2021年)
pp.70-71

雲田 友だちが？

紗久楽 うん。

西原 偉大ですね、お友だちが。

雲田 本当ですね。

紗久楽 を組の「チーム男子」感を出してください、と。

雲田 確かにいいですね。

西原 はい。その「チーム男子」感を教えていただきたいのですが、一つの組の中でそれぞれキャラクターが確立している感じがありますよね。末っ子でかわいがられている子とか、お兄ちゃんっぽいしっかりした子とか。紗久楽先生、これはどんなふうに組み合わせて、このメンツを作られたのですか。

紗久楽 私は本当に江戸の月代のお兄ちゃんたちが大好きなので、今読んだ人も江戸の男の子好きだな、カッコいいなと思ってほしいという気持ちがあるんです。そこで今でもいそうと想像できるカッコいい男の子、かわいい男の子、きれいな男の子などを全部大盤振る舞いに配置したいなと。なのでたまたまで

すけど、そういう子たちがバランス良く配置されると「を組」になるという。一番世話焼きのひと、叱ってくれるひと、危なっかしい子と、ひねくれている子。

雲田 月代のチーム男子を描き分けるのはすごいですよね。

西原 本当にそうですね。

雲田 すごいことなのですよ。

西原 すごいことですよ、本当。そうなのですよ。しかも、現代に通じるチーム男子をすごく感じるし、それが江戸一番のカッコいい男の人集団である火消し、ということがまたすごく現代とリンクしているなというふうに思います。

紗久楽 私も雲田さんも三次元というか、アイドルや芸能人がすごく好きだから。

雲田 そうですね。

紗久楽 マンガの顔からキャラクターを作るというよりも、実際のいろいろな人の顔が好きで見ていて。その顔がマンガの画、自分の画になるとどうなるか、というのを日々描いているから、キャラクターがみんな違う人になるのは当たり前という感じなのかなと。髪型が皆同じで同じ顔は本当は見分けがつかないので、読者さんにも迷って欲しくないですし。

西原 なるほど。「むてっぼうの罰だぜ」と言われてちょよちょよされる場所などは、本当にアイドルグループとかでありそう。

雲田 そうですよ。

西原 存在してほしい、みたいな。ジャニーズとかで見たい。

雲田 このアイドルグループがデビューしてほしいですね(笑)。

西原 「を組」がデビューしてほしい(笑)。

雲田 ねえ。めちゃくちゃ推したいです。

西原 本当ですよ。他の組もライバルとして。

紗久楽 出てほしい(笑)。

雲田 めっちゃいいではないですか。やりましょう(笑)。

紗久楽 それ、いいですね。

雲田 本当にやろう。誰かプロデューサーさんが声かけてくれないかね！

西原 ぜひやってください(笑)。本当ですよ。お兄さんたちにかわいがられる金ちゃんがかわいいし、年下の子をかわいがるお兄さんたちも役割が違って、また愛おしいです。本当に、わちゃわちゃしている様子を見ることが、わたしたちにとっての楽しみ。それがこんなにさり気なく、それほど大きいコマではないのにすごくグッとくる場所に描かれていて、すばらしいと思います。

紗久楽 感謝です、描く元になるいろいろな人に。

西原 ありがとうございます。次なのですけれども、現実に基づく描写とBLならではのファンタジーのバランスについてお伺いします。ここまででも分かるように、先生方はお二人とも、現実でありそうな日常生活を描かれています。紗久楽先生の場合は江戸をご自身でしっかり研究されて、史実に基づいて描かれることがBLの物語としてちゃんと成立しているところが、たいへん魅力かと思っています。

私が「百と卍」で本当に好きなシーンがあって。卍さんがすごく相撲が好きで、百ちゃんを連れて行くところなのですね【図2-30】。相撲についてめちゃくちゃ卍さんが語っていて、どうやって入場するかとか、この「土俵入りだ」というところとか、当時の両国はこんな様子だったのね、とすごく画として理解できるのです。

紗久楽 これは、お相撲好きで江戸相撲のことを調べていらっしゃるマンガ家

図 2-30
紗久楽さわ『百と卍』4
(祥伝社、2021年)
pp.34-35



さんと一緒に、何年の秋場所是谁が出ていたのかも調べて。本当に当時の相撲に出ていた人たちです、この人たちは。

西原 実際にそうなのですね。

紗久楽 そう。対戦表が残っているのですよ。

西原 では、本当にこの世界に卍さんたちが生きていたのだと思えるような感じですね。すごいです。

それで、次のところなのですから【図2-31】。

雲田 ^{おうのまつ}阿武松。

西原 阿武松緑之助。実際にいたのですね。

紗久楽 そうそう、阿武松さんも稲妻さんも、実際この時期のライバル力士で。稲妻の方が若いのですけれども、阿武松さんはアイドル級に大人気で、そんな彼をちょっと真面目系の年下力士の稲妻が追いかけるという、ものすごいライバル萌えがあったのです。

西原 それが萌える。またそこに関係性が生まれてしまう。



図 2-31
紗久楽さわ『百と卍』4
(祥伝社、2021年)
pp.38-39

雲田 落語にもなっているのですよ、阿武松。

西原 そうなのですか。

雲田 はい、すごく有名な。

紗久楽 さすが雲田先生。

雲田 それくらい現実で人気だった。

西原 では、実際に当時かなりアイドル的な存在だったのですね。

紗久楽 阿武松も江戸の色男らしく肌が白くて、こうやって取組をすると阿武松の肌が上気して桜色になっていったそうで、それが色っぽくて昔はみんな大好きだったという話があります。

雲田 それがまさかBLにつながるとは、と思いましたよね。私も、色白の白鵬関の取組後の姿を見ていると、何か気持ちが沸き立つことがあったんですが、このお話を読んで、既視感!と思いました。

西原 そんなエピソードが残っているということがすごい。

紗久楽 これはBLでしょうって。

雲田 百ちゃんがそれで発情するという(笑)。

西原 そうなのですよ。ちょっとわたしの個人的な萌えを出しすぎかなと思って、今回はあえてスキャンしなかったのですが、この次のページで、阿武松と稲妻の乳首がぶつかり合ったところを見て百ちゃんが「あっ」と欲情して、この後、卍さんとうなぎ屋にしけ込むという流れになるのです。この流れが自然にBLとなってすごいなと思って。

紗久楽 あと実際、お相撲を見ていらっしゃる人などに聞いていると、強い・かっこいいというのはもちろんですけど、どんどん色っぽさというか、江戸文化にどんどん触れていくと、お相撲取りの色っぽさが見えてくる。このテンションでお相撲を見るのもおかしくはないかと。

雲田 そうなのですか。江戸時代の人はそのようなですね。

紗久楽 「色男」といわれている、江戸の中でかっこいい職業が三つあって、それが火消しと与力とお相撲取りという。

西原 なるほど。強くてかっこいいヒーローですものね。BLの世界観の中にお相撲の色っぽさを入れようと思ったのは、やはり紗久楽先生ご自身が調べていて好きだったからというのもあるのですか。

紗久楽 お相撲自体は文化は好きですけど、スポーツ観戦や勝負事にあまり関心がないので定期的に見ているわけではないのですが、やはりお肉というか、ふっくらした男性がかっこいい、好きとっていて。それがBLではあまりなかったのが、描きたいなって。私は、よしながふみさんがマンガの中で「お相撲さん、最高だよな」とおっしゃっているのを読んでいたので、やはりお相撲が好きな先生たちはいるし、読み手もいろいろな嗜好の方がいるといいかなと思って。

雲田 相撲萌えしている方は多いですね。

紗久楽 ねえ。調べてみると、色っぽいエピソードがいっぱいあるので。お相撲の話は。

西原 お相撲取り同士で組み合わせもたくさんできますしね。

次のこちらは、紗久楽先生の最新の「純真、久しからず」という作品（2020年）です【図2-32】。「百と卍」は文政末期（1820年代末から30年）でこちらは幕末（1860年代半ばから後半）なので、時代でいうと多分30年ぐらいの違いがあると思うのですが、「純真、久しからず」を読んだときに、私もうまく説明できませんけれども、“幕末感”がすごくあるなと思ったのですね。もしかしてキャラクターの髪型の描き方や服装なのかなと思ったのですが、紗久楽先生は意識されて、30年の開きというのを描かれていらっしゃったのでしょうか。

紗久楽 ああ、どうだろう。でも、「百と卍」は江戸の浮世絵とか黄表紙とかの背景を見て描いていて、絵から絵を起こしているのですけれども、やはり幕末だったらもうちょっと人間の青春感みたいなものが現実に近い方がいいかなと思って。「純真、久しからず」はほぼ自分で撮った写真を背景にして空気感などを出しているの、それが多分ちょっと現実に近い感じがあるかなという。

雲田 背景の感じが違うのですね。

西原 ポイントは背景なのですね。

紗久楽 これは田舎の子たちなので、江戸の百さんと卍さんとは多分会うこともないだろうし。百と卍は町人で、この二人は武士、というのがありますけれども。多分こういう背景の空気感ではないですかね。あと、あまり描き込まないようにしたので。

西原 なるほど、このページも確かにそうですね。

雲田 「百と卍」はもっとイラストっぽいというか、それこそ浮世絵っぽいのですものね。

西原 そうですよ。 「百と卍」で背景に書かれている字など、浮世絵のよう

図 2-32
紗久楽さわ
「純真、久しからず 序幕」
『fromRED』
(シュークリーム、2020年)



に筆で書かれていますよね。

雲田 背景の違いでそんな差まで出るのですね。

西原 出るのですね。面白いです。

次に雲田先生の「いとしの猫っ毛」なのですが、こちらも日常生活の中にすごくBLらしいいちゃいちゃが現れるという一つの例をお示しました【図2-33】。みいくんがご飯を作ってくれて、恵ちゃんが「うまあーっ♡」と食べる。日常的な食事のシーンの後にいちゃいちゃになっていくという場面なのですけれども。

雲田 そうですね。みいくんがあまりにも駄目男なので、料理ぐらいできないと二人が平等ではないなと思って。恵ちゃんはお掃除が好き、みいくんは料理上手という。みいくんは一人暮らしが長いので料理はできる。でも、だらしのないな(笑)。

西原 てろっとした服をいつも着ていますしね。

雲田 そうですね。このマンガだと、二人が同じ位置にいるというのを意識して描いている感じがあるのですね。

紗久楽 この2コマの顔（『いとしの猫っ毛』3、p. 14）などは本当にどっちもかつ



図 2-33
雲田はるこ『いとしの猫っ毛』3
(リブレ出版、2014年)
pp.14-15

こいいいというか。

雲田 「受け」でも「攻め」でもないですよ。

西原 そうですよ。食卓のメニューがまた、お魚を焼いてご飯とおみそ汁という組み合わせとか、醤油さしがテーブルの上に載っていると、そういうさりげないところがすごく日常らしさを演出するところかなと思います。こんな感じでご飯の話をしていて、そこからいちゃいちゃになっていくという。

紗久楽 二人を横並びにしていると今聞いて、本当だと思いました。上も下もなく、本当にずっと二人横並び、素晴らしいですね。

西原 ダイニングテーブルで、二人横並びでこうやって食べている。

雲田 本当だ(笑)。対面で食べないのですね。何でだろう(笑)。

西原 これは意図的にそういう並列的な、どちらともとれる関係性を表そうと？

雲田 どうなのでしょう。それもうっすらあるのかもしれないけど、対面で描くのが大変だったのかもしれない(笑)。

西原 なるほど。でも、そういう二人の関係性の、「攻め・受け」どっちにもなれることがすごく表れているシーンですよ。

雲田 うん、そうですね。あと、このお家は複数人で共同生活をしているので、多分席が決まっている、いつも座る場所というのがあるのだろうなというの。

紗久楽 ああ、なるほど。そうですね。

西原 定位置がね。あと、さり気なく猫ちゃんが椅子にいるところとか。

雲田 いますね。

西原 そういうところも日常っぽいですよ。紗久楽先生の「百と卍」にもよく猫ちゃんが登場しますが、動物と一緒に生活しているところなども暮らしの雰囲気が出ると思います。ありがとうございます。

現実に基づく表現やいろいろな資料などに実際に書かれていることがBLの世界の中に落とし込まれていくということ、こんなふうにはマンガとして読むと改めて気づくことがたくさんありますね。架空の物語として読める部分もある一方で、リアルに繋がる発見があったかと思うところもあります。

近年ではドラマや映画での「実写BL」作品がたくさん出てきています。実写になるとやはり生身の俳優さんが演じるものなので、BLではあるけれどもよりリアル感というか、現実に近づいていく部分があるかなと思うのですが。そのあたりを、お二人はどのように楽しんでいらっしゃいますか。

雲田 最近は実写BLが盛んですけど、エロの要素がないのですよね。そうすると、いつもBL好きでマンガや小説を読んでいる読者さんとはまた違った層ができてきているのかなと思って。BLドラマ好きという層が、BLマンガ好きという層とはあまりかぶらない気もするのですよね。BLを読んでいる方は、濡れ場がないと物足りないという方もいらっしゃると思うので。

西原 確かに。濡れ場が見たくてマンガを読むという方ももちろんいらっしゃる。

雲田 そうですね。実写ドラマでは実際に演じる生身の役者さんがいらっしゃ

るから、その表現が難しいというのも分かるので、なくても全然いいものだと思うんです。生身の方が演じる物語と、架空の二次元キャラクターが演じる物語は、表現の性質が変わるものなんですね。それは拙作を俳優さんに演じていただいて、気づきました。

西原 なるほど。マンガと実写での楽しみ方の違いや求めているものの違いは確かにありそうですね。

雲田 そうですね。濡れ場がなくても楽しめるという。

紗久楽 第1部の話で田亀先生から、黎明期の『JUNE』や少年愛も『さぶ』と手を組んで結構いろいろやっていたというお話がありましたけれども、実写BLはやはり生身の俳優さんが演じることで、現実の同性愛と当事者の方と近くなっていくところが確実にあるかなと思って。

私や雲田さんは、「攻め」と「受け」が分かりやすすぎるとか、ほとんど決まっているBLから、もっと好きにいろいろなバリエーションで描きたくなくてきていて、どちらかという現実にいるかもしれない人たちに近づいて描いていたなという気がするのです。でもさっき雲田さんがおっしゃったように、本当に最近のBLドラマやもうちょっとライトなBLから入る方では、逆に「攻め・受け」がとても分かりやすいほうが好きという人も増えていて。ちょっと、90年代回帰のような。

雲田 戻っている感じがありますね。

紗久楽 「受け」の子が本当にめちゃくちゃかわいらしい子で、相手が「スーパー攻め様」で、みたいなもの新しく出てきていて、BLの流行は巡り巡るのだという。

雲田 ねえ。そっちの方が物語として明確で、エンタメとして見やすいついいうのも間違いなくあります。ドラマだとさらに、そういうシンプルな「攻め・受け」の話のほうが、俳優さんの美しさやかわいらしさが際立つのかなと思っていて。それを楽しみたいという層もありますよね。それこそ、俳優さんのいつも見られないような顔を見れるから、BLドラマが嬉しいっていうのもあると思うんです。ここでもやっぱり、BLでしか見られない顔っていうのが効いてるんです。

西原 なるほど。そうですね。

紗久楽 うちの母も実写BLを全然見ていましたから（笑）。

西原 素晴らしい、お母様とも一緒に見られる（笑）。ありがとうございます。

実写の話はまた後ほど、第2部ディスカッションのところでお話できたらいいなと思いますので、いったん先生方のお話はここで締めさせていただきます。ありがとうございます。

雲田・紗久楽 ありがとうございます。

西原 では、最後になりましたけれども、『ちるちる』のスタッフでいらっしゃいます岡田夏実さんから、現在の『ちるちる』というレビューサイトでどのようにファンの方々が参加されているのかなどをお話しいただきたいと思います。岡田さん、よろしくお願ひいたします。

岡田 よろしくお願ひいたします。『ちるちる』スタッフの岡田夏実と申します。最初に簡単に自己紹介させていただきますと、私は2016年頃から学生インターンとして『ちるちる』でライターをやっておりました。その後卒業するタイミングでいったん別の会社に入りまして、その間も『ちるちる』でお手伝いをさせていただきつつ、2020年から社員として戻ってきたというキャリアになっております。今はマーケティングや営業、あとは「BLアワード」というランキングですとか、『ちるちる』のイベントの運営などをさせていただいております。

では、インターネットとBLということについて、『ちるちる』のお話を中心にさせていただければと思います。

『ちるちる』というウェブサイトは、日本最大級のBLレビュー&コミュニティサイトとして運営させていただいております。こういった感じのサイトになっております【図2-34】。

基本情報としては、今現在、会員が15万人ほどいらっしゃいます。全員、商業BLがお好きな方々ということかなと思います。作品登録数が11万点ぐらいありまして、作品情報が登録されているデータベースを日々更新しているという形です。2007年以降に刊行された作品はほぼ網羅できていると思います。この作品データベースに対してユーザーさんがレビュー投稿をしてくださり、現在



図 2-34 『ちるちる』トップページ (https://www.chil-chil.net/)

は毎日50件程度投稿していただいております。

『ちるちる』のレビューの特徴は、みなさんたいへん長い文章を書かれることが多いことです。1,000字を普通に超えていらっしゃる、軽いエッセイぐらいの長さの文章を書いていらっしゃる方が多いと思います。多い方では一日に3件とか4件ぐらい投稿されるユーザーさんもいらっしゃって、すごい熱量だなと日々感じております。

月間の訪問者は平均56万人ぐらい来ていただいている感じで、月間のPVが600万PVぐらいあります。『ちるちる』はTwitterの方もやらせていただいているのですが、こちらのフォロワー数は9万人ぐらいになっております。こういった規模のサイトとして運営しております。

『ちるちる』は、サイト以外にも商業BLの祭典「BLアワード」や「ちるちるフェスティバル」ですとか、ちょうどあさって開催なのですが朗読劇の「CHILL CHILL BOX」、 「BLソムリエ検定」などのイベントもやっております。

みなさんが気になるのは『ちるちる』の会員の年齢比かと思えます。まず20代の方が45%ぐらいいらっしゃって、30代の方が29%、40代の方が12%、10代の方が7%、50代の方が5%、60代の方が1%というのが最新の比率になっています。これを見ると20代の方が30代の方が結構多くて、BLのユーザーとしてはイメージどおりだなと思われる方も多いと思うのですが、20代の方々が増

えたのは実は最近のことでして、2020年以降に20代の方がかなり増えてきた感じとなっております。それまでは30代や40代の方が結構多めだったと思うのですが、コロナ禍をきっかけに20代の方がどっと増えたかなと考えております。会員の年齢比だと20代の方が多いのですが、実際にレビューをたくさんして下さったりするのは12%いらっしゃる40代の方で、結構アクティブに活動して下さっています。

続きまして、『ちるちる』の創業のいきさつや今までのことについて、ちょっと簡単にご説明させていただきます。『ちるちる』の創業が2009年ですが、弊社の代表は元々BLのことをまったく何も知らない男性でして、スタートする前は別のIT会社をやっていたのだそうです。『ちるちる』のサービス開始が2009年になるのですが、そのときはまだ現在の『ちるちる』の運営会社のサンディアスもなく、全然別の会社でITのことをやっています。当時ちょうど、ブクログさんや読書メーターさんといったレビューサービスがリリースされ始めた頃だそうでした。しかもそのときに“腐女子ブーム”みたいな、メディアで腐女子という存在が結構取り上げられており、詳しくは知らないけどこういう人たちがいるということが何となく意識にある、という状況だったそうです。

その頃に代表が、コンビニなどで『ご近所の怖い噂話』ですとか『残酷なグリム童話』みたいな、レディコミのような雑誌がたくさん置かれていることに気づいて、これだけたくさん売られているのだから実際に人気があるのだろうということで、レディコミのレビューサイトを作ろうということになったそうです。そのとき、当時いた女性社員の方に、『ご近所の怖い噂話』のような本があるだろうという話を聞いて、それを買ってきてくれないかと頼んだところ、女性の方は間違えてアニメイトでBLを買ってきてしまった(笑)ということがありまして。そこからちょっと、(買ってほしかったのは)これではないよ、という話に最初はなっとならしいのですが、とはいえBLというものがたくさん売られていて、どうやら好きな人たちもたくさんいるらしいということを知って。やっぱりレディコミのレビューサイトはやめてBLのレビューサイトを作ろう、ということで『ちるちる』が誕生したという経緯になっております。

その当時、代表もその女性社員の方もBLのことはまったく知らない状態。で、本当に何も知らないで、とりあえずなにはともあれコミケに行ってみようと思ったら、すでに夕方の4時ぐらいでほとんどのサークルが閉まっているということで、何もできずに帰ってきたりとか。そういうことを繰り返してBLの

ことを少しずつ知っていったということだと聞いております。

それで、その頃からレビューサイトを作る地盤として、刊行されているBLの情報をすべてまとめてデータベースを作り始めたり、その当時はBLの個人ブログがたくさんあったらしくてブロガーの方がたくさんレビューを個人サイトに載せていたので、それを調べていたり、ブロガーたちがどういう発言をしているのかを見てサイトを作っていたのだそうです。

『ちるちる』というサイトを作ってから記事を投稿者に依頼したり、ユーザーの意見を反映したりしていきました。たとえば「攻め」と「受け」の情報が現在の『ちるちる』に掲載されているかと思うのですが、これもユーザーから追加してほしいという意見がありまして、そこで追加されたということだそうです。そういったふうにユーザーの意見からどんどん機能を追加していったら、今の『ちるちる』の形が出来上がっていったということらしいです。また徐々にライターを採用するなど体制化して、現在に至るという形になります。

ネット上のBLと『ちるちる』の歩みというところで、ネット上やメディア絡みで軽くお話しさせていただきます。2009年に『ちるちる』がサービスを開始しまして、その後2011年が一般的に電子書籍が広まり始めた頃で、電子書籍元年というふうに言われていると思います。『ちるちる』は電子書籍と結構結びつきが強いので、その動きと一緒に成長してきた感じがあると思います。

2014年頃に「どうしても触れたくない」というヨネダコウ先生の作品（マンガ、2007年）が実写映画化されました。この実写作品がたいへんヒットしたかなと思うのですが、このあたりから結構電子書籍の風向きが変わってきて、同じ頃にBLなどもたくさん投稿されているイラスト投稿サイトのpixivの会員数が1,000万人を突破しまして、ネット上でBLがかなり盛り上がってきた頃かなと思います。

2015年頃にTwitterの登録者数が国内で3,500万人を突破して、同じ頃に電子書籍もすごく勢力を拡大していっていました。それまでの電子書籍は紙の書籍に対してわりと副次的なものとして扱われていたと思うのですが、このあたりから結構勢いが出てきて、電子が先に出る書籍も徐々に生まれ始めてきたかなと思います。

2018年で「紙・電子の優先度比率が同じに」とスライドに書いてあるのですが、『ちるちる』では毎年、電子書籍の利用アンケートを取っておりまして、ユーザーに紙と電子をどのぐらいの割合で使っていますかとか、そう

いったことを聞いているのですね。するとこの年から「どちらかというと紙を優先する」とか「紙しか買わない」という人の割合と、「電子しか買わない」あるいは「どちらかというと電子を優先する」という人の割合が同じになったということで、紙と電子のどちらが優位ということがなくなっていきます。その後も電子はどんどん盛り上がって行って、今では電子をまったく使っていない人というのはかなり少数派になっていると思います。

2016年にはTVドラマ「おっさんずラブ」（テレビ朝日系列）なども出まして、その後は映像BLが発展してきたと思います。2020年は本当にたくさんの作品が出まして、映像BL元年と呼べるような年だったのかなと。こんな感じで映像と電子書籍の進展に助けられて、『ちるちる』も成長できたのかなと思います。

次は、『ちるちる』の記事の制作体制についてですが、弊社は「BLニュース」という形で日々BLの情報を発信しております。ライターは基本的には学生インターンが中心ですが社会人もいるというメンバー構成でやらせていただいております。先ほどお話ししたとおり、私も学生インターンのライター経由で『ちるちる』に入社したので、そういった経歴の者が多いです。

学生さんに限らず社会人の方もそうなのですが、ライターの採用のときに重視することは、ライターとしてのキャリアよりもBLの知識やBLに対して熱量があるかどうかという点です。なので、ライターとして記事をちゃんと仕上げたことがなくても、BLについて詳しくあったり、BLがすごく好きだったりする人を重視しています。やはりBLの知識がないと『ちるちる』の記事は書けないので、プロのライターにBLのことを勉強してもらうよりは、元々BLが好きなお方にライティング技術を身につけてもらいたいと考えております。

そういった事情もありまして、弊社では記事の企画立案から文章のトーン＆マナー、いわゆるトンマナまで結構細かく指導しております。今は編集デスクなどが指導をやっているのですが、私の記者時代のことを少しお話ししますと、当時はまだ代表が記事に対して直接指導するような時代でした。入社してその日に書かないといけない記事を書きまして、そうすると代表がやって来て、「最近気になっていることはある？」とか、「この前言っていたあれはどうだった？」という話をして、そこから「この記事をやってみるか」みたいな話になっていきます。今もその体制は変わってなくて、編集が記者と1対1でお話ししながら企画を練り上げていく形になっております。

というのも、多くの方にとってBLは趣味であって仕事ではないので、自分の趣味以外のことに気づいたり、自分の好みを客観的に見てさまざまなジャンル

の中に位置づけたりするということが最初は難しいのです。BLが好きだということは重要でそれがベースにはなるのですけれども、そこに対して会話をしながら、自分は本当はどういうことに興味を持っているのかというのを引き出したり、あなたの好みはこの広いBLの中ではこのあたりの位置づけだという話をしたりして気づきを得てもらったりする形で、“好き”の上にプロとしての視点や客観的な視点を得てもらえるように指導しています。

『ちるちる』の記事を読んだ方は、結構独特な『ちるちる』風の文章があるなど思っただけかと思うのですが、具体的にどういった感じで文章を作っているかという、一般的なWebメディアの記事の文章とは違う部分があるかもしれないのですが、BLファンの方々に引強い文章やキャッチコピーというのを心掛けております。それをスライドで「ちるちる流文章制作メソッド」と書かせていただいています。BLファンの方々にとって、熱量があったり、具体的であるとか親近感を感じられたりすることが重要なかなというふう考えていて。過去のアクセス数などを見て評価が高い、興味を持ってもらっている記事というのはこうした部分がある記事かなと思っております。

記事の文章制作では以下の三つのことに気をつけているのですが、一つ目は「とにかく熱量を持って具体的に書く」ということですね。「かわいかった」とか「萌えた」とか「かっこよかった」というような感想は結構スルーされてしまうので、できる限り詳細に描写して、あのときの「攻め」はこうで、「受け」がこうで、「本当にバスタオルがずぶ濡れになるぐらいに泣きました」とか、そういう大げさなぐらいの比喩を使ってそのときの自分の心情や作品の良さみたいなものを熱量を持って描写すると、かなり興味を持ってもらいやすいということがあります。

二つ目は「オタク用語を使う」ということです。これは読み手に親近感を持ってもらうためです。一般的な記事の場合は、広く読まれるために強いスラング用語は使いにくいかなと思うのですが、『ちるちる』のユーザーさんは皆さんオタクの方、BLファンの方ですので、むしろできる限りオタク用語を多用していくというのを意識しています。もちろん、流行し始めたばかりの言葉だと使うときに気をつける部分があると思うのですが、その辺は逆にどんどん使っていく形で。オタクの中の流行語、例えばちょっと流行語とは言えないかもしれないのですが、「スバダリ」とか「顔面国宝」とか「○○しか勝たん」みたいな、よく見るオタク用語をどんどん使っていくことで、(BL

好きな) 同志ですよ、ということアピールしていくということもあります。

三つ目はいわゆる「パワーワード」と呼ばれるもので、本当に目を引くキャッチーなワード作りみたいなものを心がけています。パワーワードという言葉自体もオタク文化圏から出てきた部分もあるかなと思います。記事タイトルなどで一瞬で引き付けたり、これは面白いと思ってもらうためには、やはりパワーワードが大事かなと思っております。例えば、BLCDの声優さんに対してのキャッチコピーで作らせていただいた「悪魔の声帯運動」とか「キャスト買いの神」とか。見た人に思わず「どういう意味？」と思っただけのような言葉づかいで作るようにしています。こういった三つの部分を組み合わせると、BLファンの方々に引強い文章を作っているのが「ちるちる流文章」です。

それから、キャッチコピーについてなのですが、キャッチコピーは基本的に「○○攻め×△△受けの××ラブ」という感じのベースがあったうえで、引きの強い要素を抜き出すようにしています。もちろんキャッチコピーがどんな場所で使われるかによって若干異なる部分はあるのですが、型があることによってそこから変えやすいというか、当てはめる言葉をより練っていきやすいので、こういうのを基本としてキャッチコピーを作っています。

西原 ということは、ユーザーに対して魅力を伝えるときに、「攻め」と「受け」のどういうラブがあるかが分かるようにお見せしているというのが、キャッチコピーの大事なポイントなのですね。

岡田 そうです。ユーザーさんにとってはやはり、どんな「攻め」なのか、どんな「受け」なのか、どういう物語なのかというのが一番気になる部分なので、そこがはっきり分かるようにします。あとは、たまに外部にテキストやキャッチコピーを提供するときもあるのですが、そういうときに先方から「必ずこの要素を入れてください」というふうにご指定いただく場合もありますね。やはり「攻め・受け」とラブの要素が重要なかなと思います。そんな感じで文章を作っております。

最後に、最近の『ちるちる』の動向についてのお話なのですが、2020年以降、企業様からのお問い合わせや引き合いがたいへん増えております。おそらくその要因としては、映像BLが2020年以降すごく盛り上がってきているのと、コロナで自粛期間などがあっていわゆる「おうち時間」が増えたというこ

とで、BLに対して関心を持つ人が増えて、結果的にBLの売り上げが増えてきているということがあります。

企業様から、今あるBL事業を強化したいとか新しくBL事業を始めたいというお話をいただいてご相談に乗る機会が多いのですが、一方でご相談いただく企業様側には、BLの基礎知識やファン心理にあまり理解がないことも多くて、基本的な話が結構通じにくいと感じられる部分もあります。とくに商業BLと二次創作の違いが分からなかったり、コミックや小説など媒体別の特徴や規模感が分からなかったり、そういう部分で認識が結構ずれているかなと感じられるときもあります。そもそもこれがBL作品かどうか、という判断の難しい部分もあると思うのですけれども。

そういった前提のお話が共有できないことで、発展的なビジネスの話をしようとしても成り立たないと感じることも多いので、最近はBLについて学んでもらうためにBLの基礎知識やマーケティング情報を伝えるビジネスセミナー（「腐女子マーケティング研究所」）を開設しております。現在は最大で70人ぐらいの方に参加していただいているのですけれども、特に映像方面やIT系の会社さんが新たに参入することが多いです。企業側の関係者は今までのBLの歴史などはご存知でない方が多いので、そこにもっともっと広げることで、新たなBLが生まれると良いなど。マーケティングされることをあまり肯定的に受け入れられないファンの方々がいるのかなとは思っているのですけれども、とはいえやはり、ファンが求めているサービスができてしまってお互い欲しくないものが作られてしまうよりも。

西原 お互い不幸になってしまう。

岡田 ある程度、こういうものが欲しいのですよ、というのをアピールする場や分かってもらう場が必要かなと考えておりますので。ファンの方が直接ビジネスの方々に伝えるのは難しいので、ファンの方々とビジネスの橋渡しという形で今後さらに事業を広げていきたいと思っております。

西原 ビジネスとして先方にお伝えするときの、スライドに書かれている「BL基礎知識」というのは、それこそ「攻め・受け」とは何か」とか、「BLとは男性同士のラブストーリーで……」、というような初歩的なことですか。

岡田 そうです。そういったことをやはり伝える必要があります。前提として「攻め」と「受け」は簡単には変えてはいけないとか、「攻め」と「受け」がくっついた後に別のひととさらに付き合うみたいなのは、マーケティングという側面から簡単にはお勧めできないといったお話を。もちろん「攻め・受け」の役割を変えるということや別のひとと付き合うというのは形としてはありだと思えるのですけれども。「お勧めできない」と言うのと違うかもしれないのですけれども、BLの型みたいな部分を知っていただくことで、どういうふうビジネス展開するかというのを判断してもらいたいと思っております。

私からのお話は以上です。

西原 ありがとうございます。では、すみません、あっという間に残りが10分少々になってしまいましたけれども、ここから第2部の登壇者の皆さんとお話しできればと思っております。

ここまでのお話でキーワードとして出てきたものの一つが「実写化」だと思います。また、インターネットの発展で『ちるちる』さんのように情報を雑誌以外のところで知ることができるようになったことも、BLにいろいろな変化をもたらしていると思います。特に、作家さんでいらっしゃる雲田先生や紗久楽先生からご覧になった今と昔の変化とか、雑誌をお作りになっている三好さんからご覧になったBLジャンルの変化で感じられていることなどがあれば、ぜひお話しいただければと思います。

雲田 第1部からずっと聴いてきて、逆に50年間ずっと変わらないことがあるなあと思ったんですが、読者さんの支持というか、読者さんの熱い力がずっと変わらないのだというのは思いましたね。この文化を支えようという気持ちがすごく強くていらっしゃる。紗久楽さんなどは一般誌も経験されたから分かると思うのですが、BLを描くとファンレターをすごくたくさんいただけるのですよね。

紗久楽 ありがたい。

雲田 うん。

西原 一般誌よりもBLサイドの方が多い？

雲田 そうです。お手紙のみならず、誕生日やバレンタインデーなどの記念日には、贈り物までくださったりして、とてもありがたいんです。支えてくださる方の声は大きいなと思いますね。

三好 おっしゃるように、読者さんと作家さんの循環がすごくできているなと感じます。特にコロナ禍になったときにお手紙の量が増えたような感じがするのですよ。「こんなに大変なときに先生方が今も一生懸命描いてくださっているというのが本当にありがたい」という感じで、ファンの熱量がまたさらに上がったような気がしました。

西原 『ちるちる』さんもコロナ禍でユーザーが増えたということをおっしゃっていましたけれども、やはり生活の変化と趣味としてのBLがすごく結びついているのだなというのがよくわかりますね。私もお話を伺っていて思ったのは、BLファンはみなさん、好きなものが何かというのを分かっている、自分の好きなものがなくなってしまうようにずっと支えてくれる、大事にされているというのがあるのだなと。

雲田 『JUNE』の時代からずっと続いていることですよ。

三好 そうです。

西原 紗久楽先生、いかがですか。

紗久楽 私が最近特に思うのは、自分もそうなのですけども、海外のBLコミックが簡単に読めるようになってきて、海外産のBL作品も日本のBL作品も本当に世界中で読まれていることがわかります。自分も楽しんで海外の方が描かれるBLなども読んでるので、BLの広がりが本当にすごいなと思います。

西原 海外の作品は本当に、かなり早く読めるようになりましたね。電子書籍で手に入れることもできるので。

紗久楽 販売形式などで日本とはまた違うと思うのが、海外作品は1話を3コインとかで買って、結局最終話まで読んでいるという。はまる道筋の違いなどが

面白いので、これからまたどんどんBL作品の読まれ方や広がりが変わるのだなというのをとても感じます。

西原 確かに作品の読まれ方とか、どういうメディアにアクセスするかというものの変化もかなり大きなポイントかなと思います。それこそ実写から入るとか、全然違って声優さんから入るということもあると思うのですけれども、雑誌を作っている三好さんからご覧になっていると、そのあたりの変化はいかがですか。

三好 2020年が映像BL元年と岡田さんがおっしゃっていましたが、やはり実写から入ってくる人が多いなと思うのです。そういう意味では、潜在的なBLファンがまだたくさんいるのではないかなと思います。最近本当に急に目覚めたというか。

西原 急に目覚めたとおっしゃる方、いらっしゃいますよね。

三好 いらっしゃいますよね。私のプライベートな友だちなどでも、40代に入ってから突然BLを読み始めたら急激にはまり、それ以来毎日「今日は〇〇の新刊が読める」というふうに、カレンダーに花丸がたくさんつくようになってすごく幸せだと。いつでも出会いがあるのだなということをすごく感じるのですよね。

あと、作家さんにいろいろお聞きする中で皆さんおっしゃるのが、「BLをなぜ描くのですか」とお聞きすると、「最初にBLを読んだときにこれだと思った、これだと分かった」と。そういう運命的な出会いが誰に対しても起きているというのが、BLの一つの特徴かなと思っているのですが。

西原 雲田先生や紗久楽先生がまさにそういうことをおっしゃっていましたよね。これだと気づいたと。

雲田 そうですね。描かなきゃと思うのですよね。

西原 これだと思ったときというのは、びびっと来る？ じわじわという感じではなくて。求めていたのはこれだ、とはっきり分かった感じなのですか。

雲田 BLというのはもちろん、男性が主人公になるわけですが、男の子を主人公にするということが不思議となじみがいいなという感じです、私は。男子が仲良くしてるのが好きというのもあるんですが、憧れの世界なんだと思います。BLの世界は、描いていて楽しいとか。さわさんはどうですか。

紗久楽 衝撃よりやはり、すとんと腑に落ちるという感じがありますよね。稲垣足穂の『少年愛の美学』を見つけたときのしっくり感と同じだと思うのですけれども。

西原 納得できたという感じですよ。自分が好きだったのはこれだったのだと理解できた、というふうに。

紗久楽 そうです。

西原 レビューサイトの方でいろいろレビューを書かれている方も、自分が好きなものが分かっている方が多いと思います。岡田さんは40代の方でレビューを書かれている方が実際には多いとおっしゃっていましたが、それはどういう要因があるとお考えですか。

岡田 そうですね。これは単純な話かもしれないのですが、やはり今の10代、20代の方が活字に対して結構距離ができてしまっていて、長い文章を書くのが結構苦手というか、やりたくないというか、すごく長く書くのが難しいという方が結構多いのではないかとこのころがあります。あと、これはもしかしたらどの世代にもあることなのかもしれないのですけれども、特に若い世代の方は自分の感想を全くの赤の他人の方に見られるのがあまり……という方も結構いて、気心が知れた友だちやフォロワーさんにだけ見せたいとか、そもそも自分の感想で他の人に影響を与えるのはちょっと嫌かも、という方がいて。特に20代前半や10代のいわゆるZ世代の方は本当にそう感じます。今回、すごく豪華な面々の中で若輩の私が言うのも何ですけれども、若い方、特にZ世代の方の感性は全然違うなという感じがしていて、今までのBLファンの方とは全然違う形でBLを受容しているのではないかなと思うときがあります。

西原 三好さんも最後にそういうことをおっしゃっていましたが。

三好 そうですね。男性同士の恋愛をより身近に感じているというか、リアルに感じている世代なので、そうだからこそBLを読む感覚がちょっと違うのかなと。そういう人が身近にいる中でBLという位置づけなので、全くの空想上のものとは言いづらいという感じがするのですよね。雲田先生の「いとしの猫っ毛」はすごくリアルではないですか。ああいうものがとくに好まれているのではないかな、という気がすごします。

西原 そうですよ。先ほどお話ししたように、「猫っ毛」や「百と卅」でも描かれている、男の子たちがわちゃわちゃしたりいちゃいちゃしたりしている様子が結構いろいろところで、それこそテレビやYouTubeでもわりと頻繁に見られるようになって、そういう意味でもすごく身近になったなという感覚がありますよね。隠されるものではなくて、むしろ喜んで見るものみたいな。

雲田 ねえ。世界中の映画やなんかを見ていると思いますが、なぜこんなにも多くの方が男同士のわちゃわちゃが好きなのだろうと思いますよね（一同笑）。世界中のみんなが好きではないかと。時代劇だろうとSFだろうとジャンル問わず、男たちの熱い絆が、結局みんな好きだよ、と思って。

西原 嫌いな人はいないです。雲田先生にとってわちゃわちゃの魅力は何ですか。

雲田 何でしょうね、こんなに惹かれるのは。動物が仲良くじゃれてるのを見ているのと似たような気持ちになるんですが、本当に癒やされるというかね。みんなそうだと思うのですけど。

西原 本当に癒やされる（笑）。本当にそうなのですよ。

雲田 ねえ、平たく言ったら、男性の仲良しは人類みんな好きですよ、きっと。それがこんなに広がっているというのが今現在ですよ。

西原 BLのがっちりした恋愛から、本当にほのぼの日常系までのちょっとしたいちゃいちゃまで……という幅の広さが、ジャンルとしてのBLの今の状態を表しているのかなと思います。

ということですみません、あっという間に4時半が来てしまいました。ご参加

くださった皆さま、ありがとうございました。この後10分だけになりますけれども休憩を挟みまして、5時40分から第1部の登壇者の皆さまを合わせまして全体の質疑応答となります。なので、今のうちにトイレ休憩などを済ませておいていただければと思います。では、第2部登壇者の皆さま、ちょっとご移動をお願いいたします。お疲れさまでした。

一同 ありがとうございました。

◆ 註

- 1 石田佐恵子『有名性という文化装置』勁草書房、1998年。
- 2 堀あきこ・守如子「BLの浸透と深化、拡大と多様化 2000年代～10年代」『BLの教科書』有斐閣、2020年、pp. 57-74。
- 3 『ばふ』1994年8月号の「BOY'S LOVE MAGAZINE 完全攻略マニュアル」(pp. 52-59)にて、『ばふ』誌上で初めて「ボーイズラブ」という表現を用いた記事を確認できる。
- 4 西原麻里「マスメディアが映し出す〈やおい〉の姿一言説分析による」『論叢クィア』Vol.3、クィア学会、2010年、pp.62-85。
- 5 金田淳子「つごうのよくないマンガ ボーイズラブマンガにおける雲田はこの位置と批評性」『ユリイカ』56巻16号、青土社、2018年、pp. 189-197。
- 6 ここで述べられているビブロスは、1997年に青磁ビブロスから社名変更した「ビブロス」のことである。
- 7 「紗久楽さわ「百と卅」ロングインタビュー」『onBLUE』35号、祥伝社、2018年、pp. 5-15。

日本マンガ学会
第20回大会
シンポジウム

BLとメディア

第2部 「ボーイズラブ」の現在

Japan Society for Studies in Cartoons and Comics

マンガ研究 vol.29 補遺冊子

日本マンガ学会第20回大会シンポジウム

BLとメディア

第2部 「ボーイズラブ」の現在

改訂版

2023年4月25日発行

